

●ハル・リンゼイ著／松代幸太郎訳

—その正体と最後—

目次

一	何が起っているか	5
二	暗黒の君主の誕生	10
三	勝利の日	23
四	三次元の戦い	50
五	悪霊つきの診断	79
六	罪責の旅	106
七	戦いの武器	148
八	勝利	186
注		213

SATAN IS ALIVE AND WELL ON PLANET EARTH

by

HAL LINDSEY

with

C. C. CARLSON

© 1972 by Zondervan Publishing House
Grand Rapids, Michigan

2017. 11. 23 ~ 2017. 12. 29
2015. 11. 13 ~ 10. 3
2010. 7. 26 ~ 10. 11

一 何が起こっているか

数えきれない数の、目に見えない霊的存在者が、私たちのさめている時も、眠っている時も、この地上を歩き回っている。

ジョン・ミルトン「失楽園」一六六七年

何という変化であろう！ 私は、カリフォルニアの青年たちに教えるといういつもの生活のやり方を一時返上して、妻のジャンや一団の知的職業人と共に、インジアナ州で行われたある聖会で、数日間の静かな時を過していた。そこには、あわただしさは全くなく、気楽で、バッテリーを再充電するのにちょうどよい機会であった。

その静かな雰囲気の中で、これから起ろうとしていることを知っていたら、おそらく私は、急いでカリフォルニアの気違いじみたものとの生活へ逃げ帰っていたことだろう。

私たちは、二日間にわたって講義を聞いたが、それは平穩のうちに過ぎ去った。そこには、真夜中過ぎても続くディスカッション、午前二時の急用の電話、食事中でも呼び出される緊急事件——このようなものは何もなかった。私たちは、くつろいで、快適な気分にあっていた。

最終日に、私たちは、聖会に来ていた数人の婦人たちといっしょに食事をとることにしていた。そのうちのひとりが、特に私たちの注意をひいていた。その婦人が、異様な格子じまのスカートをはいていたからである。他の婦人たちは、皆流行の先端を行くような服装をしていた。しかしこの婦人だけは、極めて個性的であったのである。

朝食における話題が、たまたま予言ということに及んだ。すると、例のスコットランド風の格子じまのスカートの婦人が次のような爆弾宣言をしたのである。「私はいつも未来を見通すことができます。何が起ろうとしているか予知できるのです。」

私は、コーヒーをぐくりと飲み、彼女のほうを向いて質問を始めた。彼女の答は次のようであった。「これは、別に新しいことでも何でもありません。……私は、生れた時からずっと超能力を持っています。たぶん、私の母から、そして私の祖母から受けついだものでしょう。」

彼女がこう答える時、その場の雰囲気は急に変わったが、私はきょうまでそれをどう説明したらよいかわからないでいる。私は、それまで以上に彼女を注意深く見つめ、彼女が深刻な問題をかかえている婦人であることを見て取った。

私たちが、このような超能力の結果についてしばらく話し合った後、彼女の友人のひとりが言った。「私は、この方が何か異常なものを持っておられることを知っています。これまでも、私の生涯について、普通的手段ではとうていわかるはずのないことを話してくれました。」

1 何が起っているか

その超能力の婦人は、自慢する気持からでなく、「私は、いつもこの力が神からのものであることを信じているのです」と付け加えた。私は間髪を入れずに答えた。「それは、神からのものではありません。もしあなたが、この力を拒否しないなら、あなたは滅ぼされてしまいますよ。」その席にいた者は、皆驚きあきれたようだった。私自身、息がつまりそんな感じがした。しかし、私は、すぐに私の発言が正しかったことを知った。彼女が超能力のことを口にしてからずっと、私のうちに不安が増大していた（これは、控え目な言い方である。むしろ、悪の霊の存在によって起されるセンセーションであると言ったほうがよい）。

私は、彼女が見慣れない指輪をしていることに気づいた。それは頭が小羊で、胸は女性の胸という、サタン礼拝者が常用しているシンボルであった。

グループの人々は、早々と解散してしまった。私の不作法な言い方に当惑したのか、朝のセミナーに出席するためであったのか、よくわからない。

しかし、格子じまのスカートの婦人だけはあとに残った。明らかに、彼女は私の話をもっと聞きたかったらしい。会話の口火を切ったものとして、私は、彼女にその指輪のことを聞いた。彼女は、幼い時からこのようなものに心をひかれていて、数百ドルもする同じようなものを持っていると答えた。彼女は、それがサタンに関係しているものであることに気づいていないようであった。

それは、よく晴れた朝だった。しかし、私たちの周囲には、薄気味の悪い圧迫感が感じられた。私たちは、彼女の生涯のことを語り合った。やがて、彼女は自分の個人的な心配事を打ち明け始めた。彼女の語るところによると、彼女の夫は、最近彼女を捨ててしまったと言う。私が、「それが、なぜだか知っていますか」と尋ねると、彼女は次のような無気味な経験を告白した。

彼女は、最近抑うつ状態になり、薄暗い家にひとりですわっていたと思うようになった。夜、「霊」が彼女のところにやって来るようになり、彼女を全面的に自分のものにしようとしたと言うのである。そのため、彼女は、二、三度けいれんを起した。そして、深酒をやるようになった。そのうち、生活に落着きがなくなり、頭は混乱してきた。そして、そのような状態のさなかに、夫は彼女を捨てたのである。

私は彼女と話しているうちに、一種名状しがたい恐怖に襲われた。私はその場を逃げ出して、こうしたことを全部忘れてしまいたいと思った。その婦人が悪霊か何かであったと言うのではない。超感覚的な、人の気力を失わせるような、ある種の霊が、その場にやって来ていたのである。この時まで、私は、ただ神学校で習った教理としてだけ理解していたあるものを、現実に取り扱っていると感じていた。ただ、それを認めるのを好まなかっただけである。私は、聖書がそのようなものの現れについて述べていることも知っていた。しかし、悪霊の影響下にある者を取り扱うように求められたことは、これまでに一度もなかった。

それに続く数時間に起ったことは、私にとって、真に驚くべき経験であった。そのことについては、本書において更に詳しく述べたいと思う。ここでは、ただ私は奇蹟を目撃したと言っておけば十分であろう。この婦人は、悪霊から解放されたのである。それも、アフリカにおいてではなく、アマゾン の僻地においてもではなく、実に、太陽がさんと輝くアメリカの大学の校庭であったのである。

私は、この出来事を通して、現在のオカルト・ブームに目を開かれた。アメリカ西海岸の青年たちの間に流行している占星術、超感覚的感知、魔法、黒魔術、吉凶判断、そしてサタン礼拝が他の場所で明らかに認められるということは、私にとって驚きであった。オカルトの影響は、想像以上に深く、この国の人々の生活の中に浸透していたのである。

二 暗黒の君主の誕生

暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。

(イザヤ一四・一二)

あなたの行ないは、あなたが造られた日からあなたに不正が見いだされるまでは、完全だった。

(エゼキエル二八・一五)

一九六六年、私の友人が、ある有名な出版社に原稿を提出した。ところが、その原稿は、八つのようなテーマはもはや死んだテーマであり、こんなことを本気で信じている者はひとりもないVという理由で返された。その本の題名は、「暗黒の君主」であり、時にはサタンと呼ばれている非常に現実的な霊的存在について述べたものであった。

今日、このような題目が死んだものであると、あえて言うことのできる者が果たしているだろうか。

最近、オス・ギネスという聡明な若いイギリス人が、ロンドンにあるあちこちの図書館を広く訪れて、魔法、魔術、オカルトに関する文献を探した。彼が見出したのは、たいていの主要な歴

史書が、これらの題目をルネサンスと近代科学によってほとんど絶滅させられ、致命的打撃を受けたものとして取り扱っているということであった。しかし、一九六七年ごろを境として、こうした題目を取り扱った書物が爆発的に世に出されているということを彼は発見したのである。

私は確信している。今日の人々の大部分は、超感覚的感知、占星術、オカルト、東洋の諸宗教の種々の形態に直接携わっている者を含め、皆だれを相手にしているか悟っていないのである。

彼らの接触している者は、実は、高度に組織化された悪の軍勢の頭である、強力な、信ずることができないほどの知力を持った、霊的存在であるということを信じている者が、果して一人いるだろうか。この悪の軍勢は、神がイエス・キリストを通して提供しておられるゆるしと愛の賜物に対して、人々を盲目にし、すでに主を信じている人々の信仰を破壊し、あいまいなものにしてしまおうとけんめいになっているのである。

もしあなたが、このような主張のうちのものを受け入れることが困難であるなら、そして、「いやしくも教育を受けた者が、人格的な悪魔を信ずるなんてことができるか」と言われるなら、どうか心を開いてこの本を読んでいただきたい。そして、真実を示していただくように神に願うことをお勧めしたい。この悪魔なる者が現実存在するという歴史的証拠があり、かつ、その証拠は増大しつつあるのである。

この世における、悪の継続的な存在を説明しようとして、多くの神話や迷信が生れたことを私

は知っている。しかし、私たちがここで調べている記録は、昔のヘブル語の聖書に見出されるものである。私は、この記録こそ、人間と社会の反逆的性格を終始一貫説明しているものと信じている。

今日どのようなことが起りつつあるか、近い将来どのようなことが起ろうとしているかを理解するためには、私たちは、これらの古い文書に帰り、人間が存在する以前にどのような出来事があったかを見なければならぬ。ルシファーという、高い地位にあった信じがたいほどの美と力と知力を持った超自然的存在者がサタン[→]となった物語は、小説よりも奇なりと言ってもよいだろう。聖書は、サタンの起原を、他の歴史的出来事と同じ正確さをもって、事実に基づいて述べている。人間の目的および運命を理解するかきは、ルシファーの神に対する反逆に端を発する先史時代の闘争に関連しているのである。

先史時代の開幕

古代の歴史は、しばしば非常にたいくつなものである。あなたがたのうちには、きっと、古代史の講義の時、教室で居眠りをしていた経験があるだろう。しかし、神の古代史は異なっている。それは、私たちひとりひとりに意義を持っているので、非常に興味深く現在の私たちにも感銘を与える。

たとえば、約四千年前に書かれたヨブ記を調べてみよう。ヨブは少しばかり問題をかかえていた。やっかいなことが増してくるにつれて、彼は、私たちがするようなことをし始めた。すなわち、神のなされたことに疑問を持ち始めたのである。

神は、ヨブに、彼が神を批判するような知恵を持っていないことを示すために、いくつかの鋭い質問をされた。その結果、神は、この地球およびそれを取りまく銀河系の創造にまつわる、とても信じられないような情報を啓示されたのである。

わたしが地の基を定めたとき、

あなたはどこにいたのか。

あなたに悟ることができるなら、告げてみよ。

あなたは知っているか。

だれがその大きさを定め、

だれが測りなわをその上に張ったかを。

その台座は何の上にはめ込まれたか。

その隅の石はだれが据えたか。

そのとき、明けの星々が共に喜び歌い、

神の子たちはみな喜び叫んだ。(ヨブ三八・四一七)

ここには、「明けの星々」「神の子たち」という興味深い表現がある。これらのことを注意深く研究してみると、旧約聖書において、これらのことばが御使いたちにのみ用いられていることがわかる。御使いたちは、人間よりもまさった知性と力を持っている。彼らは、個人的に神の御前に出て、神と語り合うことができるのである。

さて、神が宇宙を創造された時、これらの霊的存在者たちは、神のすばらしい御力を見て、「喜び叫んだ」。何という光景であろう！

彼らは、神の御国における彼らの地位のために、争ったり、議論したりすることはなかった。引照した個所では、明らかに彼らが皆、喜び叫んだと記されている。このことは、御使いたちの間に完全な調和があったことを示すものである。明らかに、この段階においては、反逆は全くなかったのである。

全き者ルシファー

この霊的な領域における最高の地位は、ルシファーによって占められていた。彼は、彼が造られた日から、すべての点において完全であった。私たちが彼に紹介される方法そのものが重要な

のである。

エゼキエル書二八章一二節において、ひとりの支配者が、ツロの君主として紹介されている。彼は、すべての富と知力をむなしいものと感じ、神となることを要求した。エゼキエル書二八章一二節において、私たちは、前記の支配者とは別人と思われる者に紹介される。彼はツロの王と呼ばれている。ツロの王は、ツロの君主の背後にあった現実の権力なのである。

「次のような主のことばが私にあった。『人の子よ。ツロの王について哀歌を唱えて、彼に言え。神である主はこう仰せられる。あなたは完全な印を持っていた。知恵に満ち、美の極みであった。あなたは神の国、エデンにいて、あらゆる宝石があなたをおおっていた。赤めのう、トパーズ、ダイヤモンド、緑柱石、しまめのう、碧玉、サファイヤ、トルコ玉、エメラルド。あなたのタンバリンと笛とは金で作られ、これらはあなたが造られた日に整えられていた。あなたは、油そそがれたおおう者ケルブであった。そして、私はあなたをそこに置いた。あなたは神の聖なる山にいた。あなたは火の石の間を歩いていた。あなたの行ないは、あなたが造られた日からあなたに不正が見いだされるまでは完全だった。』(エゼキエル二八・一一―一五英訳)

神は、真にこの者のために嘆かれた。彼は、「完全な印を持っていた」と述べられているが、

それは、ヘブル語の原語では「全きものの典型」という意味である。彼は、「知恵に満ち、美の極みであった」——すべての神の被造物の中で、最も美しく、かつ賢かった——とさえ述べられているのである。

私たちは、彼について用いられていることばの幾つかによって、彼の完全さがどのように申し分ないものであったかを理解できるであろう（この完全ということばが、神によって、ルシファーを記述するために用いられる時、それは決して相対的な表現ではない）。彼は、「油そそがれたおおう者ケルブ」と呼ばれている。ケルブは、高い位の御使いで、神の聖なるご臨在および神の栄光とかかわっている。ケルブは、天的な存在で、神の義を宣言する者である。

彼は、「油そそがれた」者と呼ばれている。それは、神のこの上ない愛顧を示すものである。

「油そそがれた」というのは、メシヤ、神が油そそがれた王について用いられたのと同じことばである。この者は、御使いたちの支配者であり、指導者であった。そして、明らかに、彼らを導いて、神を賛美させ、喜びの叫びをあげさせたのである。エゼキエル書二八章一四、一六節で、「おおう者」と訳されているヘブル語は、文字通りには「導く者」の意味である。

あらゆるすばらしい宝石が彼に与えられていた。このこともまた、彼の高い地位を示している。彼は、「神の園、エデン」において、「神の聖なる山」にいた。彼は、「火の石の間」を歩いていたとあるが、それは、神の聖なるご臨在を示すのにしばしば用いられる象徴である。そのような表現

が、単なる人間に用いられるようなことはなかった。

この箇所は、神がこれまでに創造された最も偉大な存在者、無比の力、知恵、美、特権、権威を持った者について語っている。これは、イザヤによれば、「ルシファー」「暁の子」と名づけられていた。彼の名は、文字通りには、「輝いている者」を意味し、非常に美しいことを表すのに用いられることばである。

宇宙の危機とも言うべき時点は、エゼキエル書二八章一五節に述べられている。そこには、「あなたの行ないは、あなたが造られた日から……完全だった」と記されているのである。

これが通常の人間について述べられていることばであると言えるだろうか。答えは否である。まず第一に、人間は造られた者ではない。（アダム以来）人間は、誕生しているのである。第二に、人間はだれも、完全な状態で生まれてくるのではない。非難されるところのない完全なルシファーは、どのような悪の形もなしに創造された。このようなことは、アダム以後の人間には、だれにも適用されないものである。

ルシファーには、どのようなことが起ったのだろうか。

「までは」という重要なことば

ルシファーの行ないは、彼に「不正が見いだされる」までは、完全であった。これが、ルシフ

「ア」の墮落とサタンの誕生を示しているのである。この不義あるいは悪がどのようなものであったかについては、イザヤ書一四章一二—一四節に、更に詳しく記されている。

注目していただきたい重要なことは、神が、ツロの君主なる人物を通してサタンに語りかけておられることである。サタンは、この君主のごう慢と、自らを神としようとする意図の、目に見えない根源なのである。スコフィールドは、人あるいは他の生物を通して間接にサタンに語りかける他の実例を述べている。それは、創世記三章一四節の、神がエデンの園において蛇に語りかけられた場合と、マタイの福音書一六章二三節の、イエスがペテロを通してサタンに語りかけられる場合である。「そのビジョンは、サタン自身の中にあるサタンのビジョンではない。神の栄光を私する地上の王のうちに、またその王を通して自己を実現しているサタンのビジョンなのである。」(Scofield Reference Bible, p. 871)

五つの「私は……しよう」

エゼキエル書には、悪の起原を解くかきがある。イザヤ書一四章一二—一四節にも、すべての苦しみをこの宇宙にもたらした同じ超自然的存在者についての記述がある。この個所が原語のヘブル語で記された時、それは、悲しみの歌であった。神は、ご自身の創造し、愛された、この被造物のことを嘆かれたのである。

「暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしてあなたは地に切り倒されたのか。あなたは心の中で言った、『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。密雲の頂に上り、いと高き方のように上ろう。』」(イザヤ一四・二—一四)

彼は、まず第一に、ルシファー「輝いている者」として述べられている。彼は、この上なく美しく、文字通り輝いていたのである。そして、彼は聖潔について全く無関係の者ではなかった。なぜなら、彼は、明らかに神の栄光をもって創造されていたからである。しかし、イザヤ書の「あなたは心の中で言った」という節が始まる時、これは悪についての現実的な記述である。心の中こそ、罪が生じた場所である。彼は心の中で五度も、「私は……しよう」と言った(訳注Ⅱ英欽定訳聖書では、五回この語が出てくる)。

ルシファーは、自分の心を、激しい反逆で満たした。彼は、神に対して独立して行動したいと思ったのである。彼は神に向かって、次のように言ったのである。「結局のところ、私は、この上なくすばらしく、この上なく美しく、この上なく力に満ちている。私が、この宇宙において、いくばくかの礼拝者を持つことがどうして悪いのか。」

彼は、「私は天に上ろう」と言った。換言すれば、「神を押しつけて、私がこのボスになろう」

と言ったのである。彼は、「いと高き方のようになろう」と言った。彼は、神になることを望んだのだ！

神は、ロボットをお造りにならぬ

神が、御使いたちの領域を創造された時（その時、ルシファーは明らかにすべての御使いのリーダーであった）、一つの計画すみの危険を冒された。神は、ルシファーの創造にあたって、彼に最大の知性を与え、彼および他の御使いたちに自分のことを自分で決定する能力を与えられた。神はロボットを望んでおられなかったのである。神は、ご自分の愛に応答し、自発的に交わりを持つ被造物を望んでおられたのである。

神は、これらの存在者を創造するにあたって、ご自身のみことと独立に行動し、ご自身を拒否することも、従うこともできるようにする危険を冒すことを十分にやりがいのあることと信じておられたのである。ルシファーは、自分がどんなに美しいかを悟り、権力と高慢によってつけ上がり、神に反逆した。彼は、「いと高き方のようになろう」と言った時、自分と神との関係を断絶したのである。

明らかに、この時、全宇宙に大反乱が起った。ルシファーが、御使いたちの革命を指導したのである。ヨハネの黙示録一二章には、三分の一の御使いたちが、この反逆でルシファーに従った

と記されている。ルシファーは、反逆し、最初の罪深い被造物となった後も、その偉大な知力、美しさ、あるいは力をいささかも失わなかった。彼は、これを多くの御使いたちを誘惑して、自分の陣営に引き入れるために用いたのである。しかし、彼は、彼を正しく行動させる一つの特色を失っていた。その特色というのは、神との個人的な関係であったのである。

全き者なるルシファー、すべての神の被造物の上に権力をふるい、神との一致を保って歩んでいたルシファーが、高慢になり、その高い地位から転落した時、神の完全な宇宙が不純なものとなった。汚れが急速に浸入してきたので、神は、汚れの元凶となっている者をさばき、彼および彼に従って反逆した御使いたちに判決をお下しになった。

サタンが誕生した！

明らかに、神がルシファーの犯罪をさばかれた時、ルシファーの名を、サタン、悪魔、悪しき者と変更された。

「サタン」は「反抗する者」あるいは「敵対する者」を意味する。「悪魔」にあたるギリシヤ語は、「告発者、中傷者」の意である。

サタンは、永久追放の判決を受けた。マタイの福音書二五章四一節において、イエスは、地獄が悪魔とその御使いたちのために用意されたことを述べておられる。

神が、サタンへの判決を宣告されて後、最初にされたことは、宇宙の遊星のうちの一つをきれいに美しくし、「地球」と名づけられたことであった。この小さな遊星は、激しい戦いの場となる運命にあった。その戦いにおいて、神ご自身が、暗黒の勢力との死闘で傷を受けられることになるのである。神は計画を持っておられた。サタンによって始められたこの先史時代の反乱を解決する方法を持っておられたのである。その計画の中に、すべての人が知っている別の被造物の出現ということも含まれていた。

以上私が述べたことは、ある人々には、聖書のほんの数節に基づいた乱暴な推測にすぎないように見えるかもしれないということを、私はよく知っている。しかし私は、聖書の他の箇所からの光を、できるだけ、明確でない部分に向けて見るように努めた。更に本書を読み進んで行かれるなら、あいまいな部分が、人間の歴史において啓示されたすべての神のお働きと首尾一貫しているものだということがわかるであろう。

三 勝利の日

初めに、神が天と地を創造した。地は形がなく、何もなかった。やみが大きいなる水の上にあり、神の霊は水の上を動いていた。

(創世一・一二)

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。

(創世一・二七)

神が遊星地球を造られた時、「人間」と呼ばれる不思議な被造物をテストするための、巨大で複雑な研究センターを確立された。しかし、人間が創造される前に、神は、この地球をサタンの反逆によって引き起された無秩序状態から回復し、獣、魚、鳥の形で地球上に住む生命をもたされたのであった。

神は、この地上を、巨大な永遠の動物園にしておくこともおできになったであろう。しかし、そうしないで、神は、現在多くの人々が複雑な感情をいだいているあることをなさった。神は、私たちに最初の両親を与えられたのである。

なぜ、神はそのようなことをしようとしたのか。なぜ、神は人間を創造されたのだろうか。こうした質問は、あらゆる時代を通じての根本的なものである。なぜ、人間が造られたのだろうか。なぜ、人間は存在するようになったのだろうか。なぜ、私たちはここにいるのだろうか。

有史以前の宇宙

私は、ここでむずかしい神学を振り回そうとしているのではない。むしろ、永遠の昔における宇宙についてなされているいくつかの推測に解答を与えてみたいと思うのである。

ある人々は、 $\wedge$ 神は、この世界を、六つの段階——長い時間によって隔てられた六つの期間——によって創造された $\vee$ と信じている。他の人々は、 $\wedge$ 神は、いろいろの異なった進化の段階を間隔をおいて並べておられる。それが今日の世界に発展したのだ $\vee$ と信じている。

更に他の人々は、 $\wedge$ 創世記一、二章は、原始および最近（永遠に比べて）の世界創造を述べている $\vee$ と信じている。

私の信ずるところによれば、創世記一、二章は、地球と宇宙の原始の創造を説明しているものではない。それ以前に、すでに地球と宇宙が存在していたことを前提としているのである。もし私たちがこの見解を考慮に入れるなら、この二つの章は、地球とその銀河系が神によって文字通り六つの二十四時間の日によって再建されたことを述べていることになる。

ヨブ記三八章四—七節にある年代記は、神が、御使いたちの反乱以前に、したがって、人間がこの地球上に出現する以前に、物質的宇宙を創造しておられたことを示している。四節には、「わたしが地の基を定めたとき、あなたはどこにいたのか」と記されている。そして、続いて創造の大いなるみわざが述べられているのである。それから七節において、神は、「そのとき、明けの星々が共に喜び歌い、神の子たちはみな喜び叫んだ」と言っておられる。本書の二章で述べたように、これは、御使いたちのことを言っているのである。この箇所はまた、御使いたちが神の御力を見て喜び叫んだ時、彼らすべて、の間に一致があったことを示している。この箇所から二つの重要なことがわかる。それは、(1)地球は、御使いたちの創造された後、創造された。(2)しかし、地球が創造されたのは、御使いたちが反逆する以前であった、ということである。創世記一章の前にあった事柄についての聖書からの少しの光を注意深く総合してみても、私は、 $\wedge$ 神が、サタンとその軍勢を逮捕し、彼らをさばかれた時、この地球は、何らかの理由により荒廃していた $\vee$ と信じているのである。

創世記一、二章において、オリジナルな創造の行為のみが、ヘブル語の「バーラー」という語によって述べられている。それは、何かを無から存在に至らせるという意味で用いられているのである。一章一節において、「バーラー」は、明らかにされていない、過去における創造のオリジナルな行為に言及している。更に一章二節においては、人間より下のすべての生物の創造が述

べられている。そして、一章二七節においては、人間のいのちと人格の創造が述べられているのである。

創造に関して用いられているその他の語は、何らかのオリジナルな創造の行為を意味しているのではない。むしろ、一章二節に、こんとんとした状態として述べられている銀河系の回復を意味しているのである。このこんとん状態は、「形がなく、何もなかった」と訳されているヘブル語の原語「トーフ・ワ・ボーフ」の文字通りの意味である。この表現は、単なる「未発達」を意味するものではない。そうではなく、突然の大変動の結果が何であるかを意味しているのである。

これは時には、「間隙説」と呼ばれている。一章一節と二節の間に経過した期間のゆえに、このように呼ばれている。

バーンハウスは、地球の最初の創造と、こんとん状態からの回復までの時を、「偉大な時の隔たり」と言っている。彼がこの見解を裏づけるためにしている最も適切な記述の一つは次のようなものである。「もし完全な神が、非常に不完全な世界——こんとんとした状態の荒廃した世界——を創造されるとすれば、それは、聖霊ご自身によって述べられている偉大な霊的原則の「一つ、すなわち、『泉が甘い水と苦い水を同じ穴からわき上がらせるというようなことがあるでしょうか』(ヤコブ三・一二)という原則を犯すことになる」^{注1}」

それに続く、こんとん状態となった地球の再建の後に、神は人間を創造された。そして、今や人間は最も重要な存在となっているのである。

砂の中の足跡

永遠の過去においては、ただ一つの意志、神のみどころがあっただけである。悪は全くなかった。ただ調和と聖と義があっただけである。ルシファアの心の中に発生した第二の意志が宇宙に入った時、反乱が起った。私たちが知っているように、「二つの意志の存在の時が始まったのである」。

ある偉大な聖書学者は、罪の最も短い定義は、「私は……しよう」ということだと言っている^{注2}。サタンが生れ、その傲慢な「私は……しよう」を始めた時、神はちゅうちよされなかった。すなわち、神はサタンをご自身の統治における権威ある地位から追放されたのである。

宣戦布告がなされた。しかし、神は、不意打ちに会われたのではなかった。神はご自身の計画を用意しておられた。そして、人間を創造して、この計画を実行に移されたのである。

疑いもなく神は、私たちには推測できない多くの理由によって、人間を創造された。しかし、私は次に述べるのが主要な理由であると信じている。神は、ご自身の完全な愛を実証し、ご自身のもとにとどまっている御使いたちに、ご自身が、サタンとその追従者を永久に追放されたの

は、不公正でも愛に欠けた行為でもなかったということを示そうとされたのである。神は、この、ゴルゴタにおいて最大限に実証された。

おそらく、もう一つの理由は、神のみこころを拒否する選択が全く愚かであるということを示すことであつたであろう。そして、最後の理由は、神が人を御使いたち以上に高め、ご自身との交わりに入らせることを望まれたということである。

ヘブル人への手紙において、神は、人間が来るべき世を支配すること、御使いたちが現実人間に支配に服するに至るであろうことを示しておられる。「神は、私たちがいま話している後の世を、御使いたちに従わせることはなさらなかったのです。むしろ、ある個所で、ある人がこうあかししています。『人間が何者だというので、これをみこころに留められるでしょう。人の子が何者だというので、これを顧みられるでしょう。あなたは、彼を、御使いよりも、しばらくの間、低いものとし、彼に栄光と誉れの冠を与え、万物をその足の下に従わせられました。』」(二・五―八)。

使徒パウロも、コリント人への手紙第一、六章三節で同じことを言っている。「私たちは御使いをもさばく者だ、ということ、知らないのですか。それならこの世のことは、言うまでもないではありませんか。」

しかし、人間は、神のデモンストレーションの単なる手先なのではない。人間は、自らの運命

をになっているものである。神は、ひとりひとりの人間に、大いなる愛と関心を持っておられ、ご自身の提供しておられる和解を信ずる者に、全きゆるしをお与えになるのである。

創造の極致

宇宙の無数の銀河系の中から、神は、ご自身の偉大な創造の努力の対象として、一つの銀河系をお選びになった。神は、遊星の中の一つをテストの場として、どのような進歩的な重役会も想像しえないほどの、包括的な、複雑極まる実験センターとして取っておかれた。

神はこの世界を六日間で創造することにされた(もししようと思えば、神は一瞬間のうちにもそれを行うことがおできになったと思う)。六日目に、神の最も偉大な創造、人間の創造が記されている。

「そして神は、『われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。』と仰せられた。神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された」(創世一・二六―二七)。

重要なのは、人間の非物質的な部分が、神のかたちに創造されたということである。神は、ご自身の本質的要素として、腕や足やからだを持っておられない。人間における神のかたちとは、

意志、知力、情緒、道徳的理性、永遠の存在を所有していることを指している。これらすべては、聖書が人間のたましいと呼んでいるものの一部をなしている。

御使いたちもまた、これらの性質を持っているが、その上に、わずかばかりの人間よりまさった付加物を持っており、それによって、人間から区別されている。御使いたちは、人間よりまさった機動性と知力を持っている。しかし、人と御使いは、非常に重要な共通の性質を持っている。どちらも、選択の自由と、選択する知力を持っているのである。

隠れる場所はない

ひとたび人間が創造されると、人間は、神の御使いたちと墮落した御使いたちの両方に見守られていた。それは、奇異な考え方ではないだろうか。私たちは遠く離れた太平洋の島や孤立した山の中へ逃れると、すべての人、すべての物から隔絶したと思う。しかし、それでもなお、私たちは、御使いたちによって見守られているのである。私たちは、聖書の多くの個所からこのことを知っているのである。

ルカの福音書二章八—一四節では、御使いたちが羊飼いを訪れ、救い主の誕生を告げている。エペソ人への手紙三章においては、神が人間を通してご自身に関する多くの事柄を、「天にある支配と権威」(御使いたちに関してのみ用いられることばで、その位や序列を述べている)に

教えておられることが記されている。

もし人間が、御使いたちの側における多くの研究の対象となっているとすれば、私たちは、「なぜ」と尋ねなければならない。御使いたちは、何を見守っているのか。御使いたちは何を学んでいるのか。私は次のように信じている。神は、御使いたちに、人神が御使いたちに永遠のさばきを下されたことは、完全に正しいことであった。そして、神の愛は、この上なく大きいものであり、どのような被造物もそれを押し量ることはできないVということを示しておられるのだ、と。

楽園発見

人間の非物質的な部分は、常に存在し続けている。それは、常に生き続けるのである。その意味においてもまた、人間は神のかたちに創造されている。人間は、創造された時に、自分自身および地上のすべてのものを支配する正当な権威を与えられたのである。この責任は、創世記一章二八節に明確に記されている。「神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。『生めよ。ふえよ。地を満たせ。地に従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。』」

それは、記憶すべき重要な事実である。神が人間にその法的な権利をお与えになった時、人間は、園の中に置かれた。そこにおいて、神は、考えうる限りのあらゆる必要を備えられていたの

である。私たちは、ここで、私たちの人間としての想像力を動員して、それがどんなに完全な環境であったかを考えてみてよいだろう。エデンの園においては、公害絶滅の宣伝をしたり、水質保全局や大気保全局を設けたりする必要は少しもなかったであろう。

神が人間を創造された時、人間が園において共に過す仲間を必要とすることを覚えておられた。それで神は、女の形をしたこの上なく愛らしい被造物をお造りになった。エバは、これまでに存在した最もすばらしい女性であったに違いない。今日、私たちはあまりにもしばしば、古代人は現代人よりずっと劣っていたと考えがちである。しかし、事実はその逆である。聖書によれば、アダムとエバは、かつてこの地球という遊星の上を歩んだ最も美しいホモ・サピエンスであった。彼らは、神によって、直接に創造されたのである。男はしばしば次のように考える。「もし私が、この上なく美しい女性を配偶者として持っているなら、すべての問題は消失するだろう。」また女は考える。「もし私が、完全な、美しい男性を持っていたならば、私の問題は解決されるだろう。」また、他の人々は考える。「もし私たちが、完全な社会、生態学上のバランスのとれた、すべての物質的、必要の備えられた、しっかりと社会を持っているなら、私たちに問題は、何もないだろう。」アダムとエバは、これらのすべてを持っており、その上に、神との個人的な交わりも持っている。しかし、彼らはそれを捨ててしまったのである。

理由のある反逆者

創世記三章は、何というドラマであろう。どのような賢明な劇作家が、どのような人物を登場させても、どのようなサスペンスを作り出すための心理学的トリックを用いても、エデンの園に起った事件以上の筋書きを作り出すことはできなかったであろう。

舞台には、アダムとエバがいる。彼らは、神との交わりのうちに生き、神の愛の証拠をいたる所で見ている。しかし、一つの禁止条項があった。人は、その園の中にある木の実を食べてはならなかったのである。その木は、「善悪の知識の木」と呼ばれていた（知識にあたるヘブル語は、「経験的な知識」を表す）。私たちは、その木にどのような種類の実がなっていたかを知らない。しかし、それは大が神との完全な交わりのうちにあり続けることを願っているかどうかをテストするためのものであった。そのテストは、神にご自身の義と愛を、御使いたちに示す舞台を提供することになるであろう。

人は、もしこの木から取って食べるならば死ぬであろう、と告げられていた。木そのものが悪かったのではない。木には、実を毒するような致命的な殺虫剤がふりかけられていたわけではない。悪かったのは、神の啓示されたみこころを拒否し、その結果として神との交わりを拒んだことであった。

舞台は整えられ、サタンの登場が許された。それまで彼は、いつも舞台裏にひかえていた。そして、どのようにして、自分がしたように人間を神に反逆させてやろうかと考えながら、登場のきっかけを待っていたのである。そして、明らかに劇の中心は、人間を堕落させるというこの幕にあると考えていたのである。

サタンは、非常に賢明であつたかもしれない。しかし、サタンは、彼よりはるかに賢明なおかたを相手にして戦っていたのである。なぜなら、サタンが人間を堕落させた時、神にとっては十分計算ずみのことをしたにすぎなかったからである。サタンは、神を打ち負かすどころか、自身自身のためのわなをしかけたのである。サタンは、それを通して神がご自身の義と愛を無限に示すことのできる状況を作り出したのである。

神は、人間が堕落することを望んではおられなかった。しかし、人間が堕落した時、神は不意打ちに会われたのではない。神は一つの計画を持っておられた。すなわち、人を、その反逆の状態から救い出す計画を持っておられたのである。

どのようにしてサタンは人間を堕落させたか

創世記三章は、おそらく、聖書の中で最も重要な章の一つであろう。私たちは、歴史を把握するために、それを理解していなければならない。創世記三章一節には、「さて、神である主が造

られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であつた」と記されている。

この「狡猾」と訳されていることは、ここでは賢いという意味でなく——サタンが賢いということを私たちは知っているが——優美で愛らしいという意味である。私たちは、蛇というと、腹ではい回るぬらぬらした生物を考える。しかし、そのころの蛇の状態はそうではなかったのである。原語のヘブル語では、「蛇」は輝いて美しい、あるものを意味する。それは、意味の上では、「ルシファー」に似ているのである。

明らかに、当時、蛇は「野の獣」と記されているように、足で歩き回っていた。蛇は、動物のうちで抜け目なく、極めて賢く、そして陰險だったのである。サタンが、その悪だくみを始めた時、その計画を徹底的に練ったことは明らかであった。サタンは、どのようにすれば、男女を神に反逆させることができるかという観点から、徹底的に研究をした。そして、事態を分析した結果、男と女のうちに、女のほうが誘惑しやすいことを知った。サタンはまた、エバを反逆させることができれば、アダムは、おそらく神に従うよりもエバに従うであろうということも悟ったのである。

サタンは、園におけるエバとの出会いにおいて、実にうまいタイミングをとった。彼は、エバを誘惑する最適の時機が到来するまで、じっと待っていた。彼は、もし誘惑に失敗すれば、再び彼女をだますことは困難になるということを知っていた。またサタンは、直接エバを誘惑しない

で、美しい生物である蛇を用いたのである。

このことが起った時、エバはどこにいたのだろうか。この章の文脈から、彼女が善悪の知識の木のかたわらにいたことは明らかである。彼女は、すでに、その木に対して好奇心を持っていた。この好奇心は、これまで多くの人々にトラブルを起してきたものである。かわいそうなエバは、禁断の木を見ていた時、力強い、邪悪なサタンが息を殺して見守っていたことに気づかなかったのである。おそらく、彼女はそこに立って、「なぜ神は、私がこの木から実を取って食べるのを望んでおられないのだろう」と、考えていたであろう。

サタンはすでに、彼女に、その木を見つめよという暗示を与えていた。これが、サタンの人間に対する働きかけの方法である。——サタンは、アイディアを立案し、暗示を与えるのである。

この上ない知力を持ったサタンは、これまでに発明された最も賢い攻撃方法の一つを発明した。彼は、暗示の力、私たちがすでに望んでいる事柄についての思いを、私たちの頭の中に入れる能力を作り出した。サタンは、私たちの生れつきの弱さを知っている。彼は、私たちの願望の最も強い領域は何であるかを知っている。彼はエバを知り、その根本にある好奇心を知っていた。そしてまさに、絶好の時をねらって彼女を攻撃したのである。創世記三章一節における原語のヘブル語が、蛇のことばに、まさにふさわしい抑揚を与えていることを理解するなら、私たちは、この敵がどんなに巧妙で悪賢いかを悟ることであろう。この質問を声を出してみて、どのよ

うな響きを持つているかためしてみてもらいたい。

「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」

何ということばであろうか。サタンは、誘惑しようとする時、そのことば遣いを実に巧妙にする。彼は、「神のことばは真実ではない」といったような教理的な言い方で、人のところにはやって来ない。むしろ、疑いを持たせて思いをむしろまさせるように綿密に用意された質問を持つてやって来るのである。彼が、エバにどのように言ったか注意していただきたい。「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない。」彼女は、自分の飢え、自分の願い、自分の必要を満たすため、どれだけの木を用いることができただろうか。一本の木を除いて、全部の木を用いることができたのである。それで、サタンは、何に焦点を合せたのだろうか。もちろん、その除外された一本の木に焦点を合せたのである。この質問は、エバの目を、神のお与えになったすべての木からそらせ、神が禁止された一本の木に注がせるためであった。サタンは、このことにおいて、まさに天才である。

毒をまく者

サタンは、疑惑の種子をまくことにおいて、達人である。サタンは、私たちを当惑させ混乱さ

せる。これこそまさに、サタンがエバにしたことなのである。

エバが、園の木から食べることに付いての蛇の質問に答えた時、サタンの毒がき始めたことがわかる。彼女は、「私たちは、園にある木の実を食べてもよいのです。しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ。』と仰せになりました」(創世三・二三)と言ったのである。

ちょっと待っていただきたい。ここに一つだけ問題がある。エバは、創世記二章一七節の命令に、彼女自身のことばのあやを付け加えているのである。彼女は、「それに触れてもいけない」と言った。彼女は、自分が問題の本質をとらえていなかったことを暴露したのである。彼女は、木そのものに何か悪いものがあると思ひ込んでいた。神は、「それに触れてもいけない」とは言われなかった。彼女は、罪を、心の選択よりもむしろ何か物質的なもの、さわることのできるものにしてしまった。彼女は、問題のとらえ方において誤っていたのである。

サタンは、彼女が、自分の計画通りにうまく乗ってきたことを知っていた。それで今度は、神のことばを真っ向から否定し始めたのである。それは、彼の特別なテクニクである。まず彼は、私たちのあやふやな領域、疑いをいだいている領域に暗示を与える。それから彼は、神の言われたことを真っ向から否定するのである。創世記三章四節において、彼は、「あなたがたは決して死にません」と言った。

エバは、おそらく、サタンの口先のうまい話に耳を傾けながら、木を見つめていたことであろう。そして、彼女が次に思ったことは、「神が、私に、この木から取って食べてはいけないと言われる理由は何だろう」ということであった。サタンは、すぐにその理由を言った。「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたが神のようになり、善悪を知ることになることを神は知っているのです。」

サタンがエバに言ったのは、神の動機は嫉妬だということである。サタンは、次のように言いたかったのである。「ごらん、エバ。神は、あなたに何か隠している。それは、あなたがこの木から取って食べると、あなたが善悪を知ることになり、神のようになるからだ。」

これは、サタンのもう一つのやり方である。彼は明確な真理を取って、私たちを殺すだけに十分な毒を落すのである。アダムとエバがその木から取って食べると、善悪を知ることになるというところは真理であった。しかし、神のようになるということは、真理ではなかったのである。サタンが、どんなに利口であるか見てほしい。彼は、すでに混乱し、的はずれになっているこの女に、神のことばを真っ向から否定させ、人神は、不純な動機を持っておられる。そして、人類を愛しておられないで、何かを隠しておられる $\vee$ という考えを受け入れさせたいのである。ひとたび、その悪賢い思いが植えつけられると、次のサタンの武器は目の欲である。

人類の中に入った毒葉

40

エバは、その木から取って食べた。すると、ただちにいろいろなことが起り始めたのである。まず第一に、私は次のようなことが起ったと思う。すなわち、エバのうちに目に見える変化が起った。木の実を食べる前、彼女は光でおおわれていた。神からの美しい輝きでおおわれていたのである。しかし、木の実を食べた後、この天的な輝きを失った。更に驚くべきことは、「いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた」ということである。

私たちが言えることは、その女は混乱に陥っていた、欺かれていた、それゆえ法的に罪に対する責任がないということである。しかし、男については、口実は何もなかった。「アダムは惑わされなかったが、女は惑わされてしまい、あやまちを犯しました」(イテモテ二・一四)。

アダムは、一戦も交えないで降伏してしまったのである。この男に対しては、一言も語られたわけではなく、一つの誘惑もかけられたわけでもなかった。彼は、目を大きく見開いたまま、罪を犯した。彼は、神と共にあり続けるより、エバと共にとどまることを選択したように思われる。彼は、冷静に、計画的に、神を拒否する決定をした。アダムは、自分自身の上に、またこの世に対して、法的な力を委託されていた。しかし彼は、神が彼にお与えになった信頼を裏切り、彼の権限をサタンに引き渡してしまったのである。

この超人的存在者サタンは、彼が偉大な勝利であると思っていたもの、すなわち、人間を引っぱって神のみところに違反させることをやりとげたのである。アダムとエバが、神を拒否し、サタンに従った時、現実にある事柄が起った。一瞬のうちに、人類は、あるひどい結果を引き受けることになったのである。

人間の墮落の結果

第一に、人間は、神が、「それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ」と言っておられたように、ただちに死んだ。彼は、私たちが持っている最も重要ないのちの領域である霊的生命を失ったのである。人間は、物質的部分である肉体、非物質的生命であるたましい、神と交わることのできる霊的生命とによってなる。人が神に背いた瞬間、この霊的生命を失い、創造者なる神との直接の交わりの道を断たれた。「あなたがたは自分の罪過と罪の中に死んでいた者であって……」(エペソ二・一)、「その知性において暗くなり……神のいのちから遠く離れています」(エペソ四・一八)と記されているように。

第二に、人間は、自己中心と神に対する反逆の性質を受けた。私たちは、人類の歴史を通して、この結果を見る。神は、そのことを、「人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だが、それを知ることができよう」(エレミヤ一七・九)と述べられている。この反逆の性質が、聖書の

中で罪と呼ばれているものの根源である。

第三に、サタンが、人間の絶対的な支配者となり、人間は奴隷となった。それは、真に陰うつな光景であった。しかし、聖書によれば、サタンは、神を拒否するすべての者を支配しているのである。イエス・キリストは、パウロを任命する時、このことを明らかにされた。「わたしは……あなたを……遣わす。それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ……」(使徒二六・一七—一八)。

第四に、人間が反逆した時、世界は、合法的にサタンに引き渡された。アダムは、宇宙を裏切る者となったのである。彼がサタンに従った時、彼は、自分自身、彼の領域の全部、彼の子孫の全部をサタンに引き渡したのである。それゆえ、イエスは、サタンを「この世を支配する者」(ヨハネ一二・三二)と呼ばれたのである。

神の登場

サタンは、園における戦いの第一ラウンドで勝利をおさめた。彼はそこで戦いが全く終わったと思っていた。しかし、それはまだ始まったばかりであった。私たちは、この大きな戦い——それは、地球の外の存在者と神との間になされた昔からの戦いに決着をつけるものである——の一部である。なぜなら、人間が墮落した後、神は、女の子孫がサタンに対して終局的な勝利を得る

という約束をお与えになったからである(創世三・一五)。今日、イエス・キリストの処女降誕に疑いをいだいている者は、神の約束によれば、終局的にサタンを征服するのは女の子孫であって、男の子孫ではないことをよく心にとめておく必要がある。約束されたおかたであるイエス・キリストは、敵サタンとの戦いにおいてひどい傷を受けられるであろう。しかし、その後、イエス・キリストは、サタンに致命的な傷をお与えになるのである。

人間がサタンの手中に落ちた時、神はただちに、人間をこのどうしようもない状態からあがない出すための、ご自身の計画を開始された。サタンが計算に入れていなかったのは次のことであった。すなわち、神は、この上なく義なるおかたであるので、神の義が満足されない限り、人間をゆるすことをされまいということである。そして、それより更に驚くべきことは、人神は、この上なく愛に富んだかたであられるので、進んで、天より下り、一時的にすべてのご自身の神としての権利を捨て、人間となられるVということであった。サタンは、神が後に、人間として十字架につき、全宇宙の罪に対するご自身の正しいさばきをご自分の身に負われるということを予期していなかったのである。

ちよつと考えてみよう

おそらく、サタンは次のように考えたであろう。もし彼が、神の新しい被造物に罪を犯させる

なら、神は、人間を罰するよりもむしろ、ご自身の正義を曲げ、サタンを放免してくれるだろう、と。

サタンは、次のように推論したかもしれない。もし私が、人類のうちの十分な数の者に神を拒否させたなら、神は彼らすべてをさばくことはできないだろう。そして、ついには、彼らを放免することであろう。ひとたび、神が、人間に関してご自身の義において妥協するなら、神は、私にも、私の手下の御使いたちにも、同じようにしななければならないであろう、と。

あなたは、これまでに、だれかが、「私は、神がそれらすべての人々を、罪に定められるということを、信ずることができない」と言うのを聞いたことがあるだろうか。彼らは、いったいどういう理由でそのように考えるのだろうか。

神は、人間のかたちをとり、ご自身の上に、人類全体が受けるべき正当な怒りのすべてを注ぎ出された。それゆえ、イエスの十字架のもとに来る者はだれでも、その怒りからかくまわれるのである。神の家族となるために、私たちのしなければならぬことは、イエス・キリストが、私たちの罪のために、私たちに代って死んでくださった事実を承認すること、そして、身代りであるイエス・キリストが、私たちのために提供してくださるこのゆるしの賜物を、単純に受け入れることだけである。神の御霊は、それを次のように美しく述べておられる。

「私たちが逃れる道もなく、全く窮地に陥っていた、まさにその時、キリスト様はおいでになり、何の役にも立たない、私たち罪人のために死んでくださいました。たとい私たちが良い人間であったとしても、だれかが自分のために死んでくれるなどとは、考えてもみなかったでしょう。もちろん、そういう可能性が全然ないわけではありませんが。しかし、私たちがまだ罪人であった時に、神様はキリスト様を遣わしてくださいました。そのキリスト様が私たちのために死んだことにより、神様は私たちに、大きな愛を示してくださいました。キリスト様は、罪人のために、血さえ流してくださいましたのですから、神様が私たちを無罪と宣言した今は、もっと素晴らしいことをしてくださいるに違いありません。今やキリスト様は、やがて来る神様の怒りから、完全に救い出してくださいるのです。私たちが神様の敵であった時に、神のひとり息子の子の死によって、神様のもとに連れ戻されたくらいですから、私たちが神様の友となり、神様が私たちのうちに生きておられる今、どんなに素晴らしい祝福が備えられていることでしょう。」(リビングバイブ

ローマ五・六—一〇)

神が、十字架において、このことを成就された時、それは、ご自身が完全に義であられることを決定的に示された。なぜなら、彼は、人間をこの闘争から救い出すために、ご自身の義を曲げることになさらなかったからである。彼は、ご自身の愛がどんなに大きなものであるかをお示

しになった。なぜなら、彼は進んで人となり、人を自由にされるために、ご自身のさばきをご自身で負われたからである。

「女はびっくりしたようです。『あれまあ、あんたユダヤ人じゃないのさ。あたしはサマリヤ人だよ。なのにどうして、水をくれなんて頼むのさ。』」当時、ユダヤ人はサマリヤ人を見下し、口をきこうとさえしなかったのです。」

『もし、神様があなたに、どんなに素晴らしい贈り物を用意しておられるか、また、わたしがどれかを知ってさえいたら、あなたのほうから、いのちの水をくれと願ったでしょうね。』(リビングバイブル ヨハネ四・九—一〇)

これが、神の義と愛の究極的な例証である。これらすべては、「神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるため」(ローマ三・二六)になされた。

サタンは次のように考えていた。もし、彼が神の御子なる人を滅ぼすことができるなら、もし、彼がイエス・キリストの人間性を滅ぼすことができるなら、彼は勝利を得ることになるだろう、と。彼は、人の子が決して墓からよみがえることはできないと考えていたのである。ひとたび死ねば、人の子はいつまでも葬られたままにいるだろうと考えていたのである。

イエスのよみがえりは、サタンに敗北の証印を押した。それはイエスが、これまでに犯され、またこれから犯されるすべての罪の値を完全に支払われたことの神の証明であった。たとえ一つの罪でも、その値が支払われないままであるなら、キリストは墓の中にとどまっておられたことであろう。イエスが生きておられるという事実は、彼を信ずるすべての者が、聖なる神の前に義と認められるということを立証しているのである(ローマ四・二五)。

今やサタンは、信者に対して、いささかの法的権威も持っていない。

サタンの目隠し

サタンは、園における一つの戦闘で勝利を得たかもしれない。しかし、全体の戦いにおいては、勝利を得ていないのである。彼はすでに敗北している。そして、彼はそれを知っているのである。彼は、あらゆる惑わしの策略を用いて、できるだけ多くの人々にそのことを知らせまいとしている。特に、イエスを信ずる人々に、そのことを知らせまいとしている。サタンは、すでに、神がイエス・キリストを通して無代価で提供しておられる、よいおとずれに対して、未信者を盲目にすることにより、未信者を自分の手中におさめているのである。

「もし私たちの宣べ伝える良い知らせが、だれかの目に隠されているとしたら、永遠の滅びに

突っ走っている人に対してです。それは、この邪惡な世の神であるサタンのしわざです。目隠しをさせて、その人の上に輝いている良い知らせの榮光が、見えないようにしているのです。また、まことの神、キリスト様の榮光に関する、私たちのすばらしい証言を、理解できないようにしているのです。」(リビングバイブル II コリント四・三、四)

今、たった今

あなたは、この闘争において、どこに立っているだろうか。ひよっとすると、これらの事を受け入れるにあたって、困難を覚えているかもしれない。もしそうなら、だが、あなたを助けて、そのように考えさせているかを推測していただきたい。

あなたが悟らなければならない最も重要なことは、あなたは、神の永遠の家族のメンバーとなるために、一つ一つすべてのことを信じなくてもよいということである。あなたが必要としているのは、神に向かって心から叫び求めるだけの信仰を持つこと、そして、神の標準に達することのできないあなたのためにイエス・キリストが死んでくださったことに対して、神に感謝することである。あなたの罪のゆるしを受け入れ、そのために神に感謝せよ。イエス・キリストに、たった今、あなたの生活の中に来て、それを神に喜ばれるものにし始めてくださるようお願いしたい。

もしあなたが、このことをするなら、神のみことばの權威によって、あなたが、今永遠のいのちを持っていることを私は断言する。

四 三次元の戦い

あなたは、戦いのために、私に力を帯びさせ……。

『ダビデ』詩一八・三九

スイスのラブリ・フェローシップのクリスチャン学者であるフランシス・シェーファー博士は、最近、私に、「今の時代は軟弱なクリスチャンの時代であってはならない」と語ってくれた。

彼は、私をもかき立てているある事柄について彼の関心を語った。彼は、イエス革命(ビリー・グラハム「もう一つの革命」参照)において、クリストに向かいつつある数えきれない若い男女に接触し、彼らに新しい信仰における深みの訓練を与えることが、この上なく必要であることを感じているのである。

私は、シェーファー博士が正しいと信ずる！ 私は神の御霊が、アメリカやその他の国々の青年たちに、特にかつてはヒッピーと麻薬で知られた地域にいる青年たちになしておられる、驚くべきみわざを目撃する時、実に血わき肉おどる思いがする。私は青年たちが、イエス・クリストを信ずることにより、絶望的なヘロインへの耽溺から救い出されるのを見てきた。毛沢東に心酔

していた急進論者が、イエスの愛を伝える急進論者になっている。かつてのギャングが、今ではイエス・クリストの真の弟子になっている。どのような人、どのようなグループも現在起りつつあることを自らの功績とすることはできない。それは神のみわざである。

これはすばらしいことであるが、私が恐れているのは、信仰的に成長し十分な訓練を受けた教師たちが、「イエスの民」(イエス革命で回心した人々)に感化を与え教育しなければ、彼らは恐ろしい誤りに陥り極端に走るのではないかということである。今日、私たちが三次元の戦いに従事していることを理解しているクリスチャンはほとんどいない。私たちの内なる平安、人生の目的、そしてすべての信者が受けついでいる、新しい力の源が危機にひんしているのである。

あなたの人生は、神のために価値あるものとなるか、あるいは横道にそれて、敵の反対によりなまぬるいものとなるかのどちらかである。

戦術

イエス・クリストを信じ、救い主として受け入れる時、私たちのいづく最初の願いの一つは、イエス・クリストに喜ばれる生活をしたいということである。これは、私たちのうちに与えられた新しい性質のゆえである、この時点において、私たちは皆、理想のタイプの人間になるのを妨げている多くのハンディキャップが自分にあることを見出す。

私たちが、それをどのように表現するか知っていようといまいと、三つの戦線において戦っているのである。それは、世、肉、そして悪魔と呼ばれている。

歴史を通じて戦いの指揮官は、子どもが棒を振り回すように、あらゆる方面を攻撃するようなやり方で敵に近づいたことは決してない。彼らは注意深い戦術を用い、敵の動きを研究したのである。第二次世界大戦の時の最高級の戦術家であったアルバート・ウェデマイアー將軍は、一九三〇年代の終りにドイツの陸軍大学に入り、後に敵となる人々から戦術を学んだのである。彼は次のように言った。

「ドイツでは、フレデリック大王、ナポレオン、カエサル、アレクサンドロス、およびマケドニア王フィリップの戦術が特に強調されていた。

われわれが、フレデリック大王やナポレオンの戦術を研究した時には、たいてい実際に戦闘が行われた地域へ行ったものだった。戦術史の教官は、状況を再検討し、彼我の形勢や戦術上の決定を分析し、興味ある逸話をも話してくれた。^{註1}」

もし私たちが、自分たちの従事している戦いを理解し研究しようとするなら、戦いがなされている地域について知らなければならぬ。「肉」は、私たちの敵サタンが、神のみこころに従おうとする私たちを絶えず妨害している一つの戦場である。

肉のわな

「肉」(原語のギリシャ語では「サルクス」)は、新約聖書ではいろいろな意味に用いられている。時には、ルカの福音書二四章三九節におけるように、単に私たちの骨をおおっている物質を意味することがある。「わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。わたしにさわって、よく見なさい。霊ならこんな肉や骨はありません。わたしは持っています。」

時には、肉は使徒の働き二章二六節におけるように、からだ全体を表すのに用いられることがある。「それゆえ、私の心は楽しみ、私の舌は大いに喜んだ。更に私の肉も望みの中に安らう」(英訳)。

また、時には「肉」はコリント人への手紙第二、一〇章三—四節におけるように、私たちの身体的、地上的な制限の意味に用いられることがある。「私たちは肉にあって歩んではいても、肉に従って戦ってはいません。私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。」

しかしそれを、戦いの場としての用法で最も発展させたのは使徒パウロである。アーンスト博士とギングリッチ博士は、次のように論評している。「パウロの思想において、肉は特に罪の自発的な手先であり、全く罪に従属しているので、肉がどのようなものであれ、そこには必ずあらゆ

る形の罪が伴う。そして、どのようなよいものも、肉そのものの中には生存しえない。^{註2}「肉」がこの意味に用いられている多くの箇所を注意深く研究してみると、次の諸事実が明らかになる。

1 それは、肉体的に生れた時から私たちのうちに働いている基本的な性質ないしは原則である。この性質は、神に反逆している。それは、自己中心的であり、自分自身の道を行こうとする（ローマ七・一四—二四、八・五一—九）。

2 それは、私たちの物質的なからだの分離しえない部分であり、私たちが一変してよみがえりのからだを受けるまでは、根絶しえないものである（ローマ七・二五、Iヨハネ一・八、一〇）。

3 それは、根絶しえないものであるが、それがクリスチャンの生活において働く力は、私たちが、罪に対して死んだキリストに結合されることにより、骨抜きにされる。肉は、もはやクリスチャンの生活を支配する権利を持っていない。そして、私たちがこのことを真実と考える時、私たちの生活における肉の力は打ち破られているのである（ローマ六・一—一四）。

私たちが、人神はすでに私たちに對する罪の力、肉の力を打ち破ってくださった¹ということに信ずる態度をとる時、神の御霊は勝利を、私たちの経験の中で現実的なものとしてくださるのである（ローマ八・一—四）。

以下に掲げるのは、肉の力を打ち破られたものと考えず、神の御霊により頼むことをしない時、

肉が私たちの生活においてどのようなことをするかのリストのほんの一部である。「肉の行ないは明白であつて、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません」（ガラテヤ五・一九—二二）。

肉の行いを表すのに用いられているこれらのことばの大部分は、もっと詳しく説明する必要がある。ここでは、そのうちの特殊なものを取り出して説明することにしよう。

不品行¹、ギリシャ語の原語は「ポルネイア」で、結婚による以外のあらゆる性交を意味している。

汚れ¹、不純な思いおよび行為、特に性の領域におけるものを指す。

好色¹、主として感覚（食物、音楽、性、動物的な慰め等）に対する抑制しえない欲望¹を喜ばせるために生活すること。

偶像礼拝¹、私たちの注意や傾倒の対象として、キリストより優先させるすべてのもの。例えば、ガール・フレンド、ボーイ・フレンド、子どもたち、仕事、教育、美しい住家、着物、すりとしたからだ、速く走る自家用車などがこれに該当することがある。

魔術¹、ギリシャ語の原語は「ファルマケイア」で、薬剤に関連した魔法やオカルトの慣習を指す。

す。

敵意、人々と不和になること。恨みをいだくこと。

党派心、現代人はこれを「性格上の争い」と呼ぶが、「利己主義」と言うほうがもっと正確である。

分裂、人々の間で争いを引き起し、仲たがいすること。

分派、文字通りには異端。偽りの教理により邪道に導き、セクトを作ること。

ねたみ、他の人々が持っているものを欲しがる不満な態度。

酩酊、アルコールや薬剤を用いることにより、通常の判断力や意識を失うこと。神の御霊によ

ってではなく化学薬品を用いることにより、生活を向上させようとする考え方。

遊興、過度の宴楽を追求することにより、現実からの逃避を計ること。

以上は、肉の行いのうちのほんの幾つかをあげたにすぎず、すべてではない。使徒パウロが、そのような事柄を習慣的に行っている者は「神の国を相続することはありません」と言った時、彼は、常習的にそのような事柄にふけっている者は罪を憎むという新しい性質を決して受け取っていない、という証拠を示しているのだということを意味していたのである。

クリスチャンは、神の前に心をひるがえし信仰の後退をしなければ、肉の行いを常習的にすることはありえないのである。聖霊が私たちのうちに住んでおられる事実のゆえに、罪の中で継続

4 三次元の戦い

的に幸福であるわけではない。遅かれ早かれ、クリスチャンは、自分の罪を認め、罪の力から解放してくださるキリストに信頼するようになるであろう。そして、彼自身の幸福という観点からすれば、それは早ければ早いほどよいのである。

肉の行いを長期にわたって継続的に黙認することは、その人が、「私はほんとうに生れかわっているのだろうか」と自分自身に問いかける理由になる。真のクリスチャンもこれらの肉の行いを経験することはありうるし、また、実際に経験している。しかし、彼は、キリストのゆえに、それらの肉の行いから救い出されたいという願いを持つであろう。未信者はただ、肉の行いの結果から救い出されたいという願いを持つだけである。

肉の行いと悪霊

今日、あるクリスチャンは、悪気なしに悪霊について極端な見解をいだく傾向がある。注意していただきたいのは、実際には肉の行いであるものを悪霊のせいにしてしまうことである。

あなたは、人々が、「虚言の悪霊」とか、「肉欲の悪霊」とか、「ねたみの悪霊」とか言っているのを、聞いたことがあるかもしれないが、私は、そのようにただ一つのことしかできない特殊な悪霊がいることを信じない。

絶えずセックスのことばかり思っている人のことを考えていただきたい。彼は毎日みだらな思

いに夢中になっている。もし、前述のようなことを聞くと、彼は、「私は情欲の悪霊を持っているのかな」と考え始めるかもしれない。

彼は自分の思いを幾人かの友人に語る。そして、彼らはちょっとした祈り会を持って、「その悪霊を追い出し」て、信心家ぶって、「私たちは情欲の悪霊を追い出した。主はほむべきかな」と言うかもしれない。

彼はこのようにして、彼自身の感情と友人たちの宣言によって満足し、自分自身に対して勝利を得たという気になって、妻を伴ってレストランへ行く。ミスカートをはいた魅力的なウェイトレスがテーブルにやって来る。その瞬間、追い出したはずの悪霊がもどって来るのである。

この考え方における危険は、実際には肉すなわち古い罪の性質の一部である行為を、悪霊のせいに行っていることである。重要なのは、物事の正しい原因を知ることである。情欲専門の悪霊といったようなものは存在しない。情欲は肉からくる罪である。しかし、情欲を用いて私たちが道徳的な破滅に導く悪霊たちはいる。サタンが、生れつきのままの衝動を取り上げて利用することはあるが、それを作り出すことはない。彼は、すでに私たちの心の中において、進行中のあるものを利用しているのである。

広く用いられることによってその意味がゆがめられている多くの教理があるが、サタンという題目は、おそらく最も多くの誤りを伴っていることであろう。

「悪魔が、私に、それをさせたのだ」と言うのは口実である。

サタンが、あなたの持っている願望を取って自分の目的のために用いる時、彼は、あなたを強制するようなことはしない。肉の罪に陥った時、あなたがほんとうのことを言うとなれば、「私がそれをしたのは、私が、古い性質の欲望に従うことを選んだからだ」と言うべきであろう。そのように言うことは、「悪魔がさせたのだ」と言うことほど容易ではない。しかし、そのほうが正直である。

当惑した弟子たち

マルコの福音書七章には肉についての巧みな記述がなされている。イエスは弟子たちに一つのたとえを語られた。すると、弟子たちはそれについてイエスに質問した。イエスが「あなたがたまで、そんなにわからないのですか」と言われた時、首をふっておられるのが、目に見えるようである。イエスは次のように説明された。「人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出てくるものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです」(マルコ七・二〇—二三)。

イエスは、肉、この罪深い性質の根源について語っておられる。彼は、私たちの主要な問題が

私たちの環境ではなく、内なる肉の性質であることを示しておられるのである。

悪い思いが頭の中にひらめくのは罪ではない。私たちがそれに対して「否」と言わず、それを抑制するためにキリストにより頼むことをしない時に、それは、初めて罪となる。誘惑と罪とは異なっている。「鳥があなたの頭にとまるのを阻止することはできないが、あなたの髪の中で巣を作るのは、阻止できる」という古いことわざがあるが、まさにその通りである。

聖書は、肉の誘惑について語る時、いつも、それを克服するための不断の必要という点から語っている。肉の欲を克服するためには、慎重な選択によって瞬間瞬間、聖霊により頼まなければならぬ。勝利は、決して、誘惑から解放されることによって得られるのではなく、内住の聖霊の御力により誘惑を克服することによって得られるのである。

ガラテヤ人への手紙五章一六節には、「御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません」と記されている。

御霊によって歩むとは、不断に聖霊により頼む態度を持ち続けること、そして、あなた自身の人間的な方策を当てにしないことを意味する。聖書には、もしあなたが御霊によって歩むならば誘惑にあうことはない、と記されているのではなく、肉の欲望を満足させることはない、とあることに注意していただきたい。聖霊によって支配された信者も誘惑されるであろう。しかし、あなたが誘惑と戦うために御霊に信頼するのをやめるまでは、それは罪ではないのである。

聖書は、肉を克服することについて、あるいは、すべての信者ひとりひとりのうちに住んでおられる聖霊により頼んで、肉と戦おうとすることについて語っている。しかし、聖書が、「世」について語る時には、すでに得られている勝利を要求する、という述べ方をしているのである。キリストは世に対して勝利を得られた。そして、クリスチャンはその勝利を要求すべきなのである。このことは、「戦いの武器」の章で更に詳しく述べることにしよう。

世

たいていの場合、聖書に出てくる「世」ということは、ギリシア語の「コスモス」からきている。基本的には、このギリシア語はその動詞形において三つの意味を持っている。すなわち、(1)物事を整頓する。(2)組織化する。(3)飾る、着飾るである。この最後の意味から、外側を飾る、という意味の英語“cosmetics”が発達した。

第一の意味は新約聖書において、「世」は、物質的な遊星である地球の意味に用いられている(使徒一七・二四、ヨハネ一・一〇)。

第二の意味は地球上の住民の意味に用いられている。第一に、ヨハネの福音書三章一六節の「神は……ほどに、世を愛された」におけるように、一般的な人々——その善悪を問題にせず——を指し、第二に、ヨハネの福音書一四章一七節および一五章一八節におけるように、神を信じない

すべての者を指している。

第三の意味——私たちの学びにとって極めて重要であるが、この世の組織——神なしで作動するように美しく編成、配置され、イエス・キリストのすべての真理に反対する組織——を記述するのに用いられている。この世の組織は、文化、音楽、芸術、哲学、知識、社会的関心、福祉計画、科学、政治、宗教、娯楽といったような美しい概念で飾られている。それは整然としたシステムにおいて、これらのすべてを包含し、これらはそれ自体としては悪ではない。しかし、サタンは、これらをこの世の秩序の中に織り込んでいるのである。それは、彼が、人間の心を神との真の関係から引き離し、この世的、物質的な事柄に集中させようとするためなのである。

この世の制度の始まり

エデンの園において、人間はこの世の権利証をサタンに与えてしまった。それ以来、この世はサタンの支配のもとにあるのである。人間が神を拒否する以前には、神と相入れない、秩序ある世の制度といった意味の「コスモス」は存在していなかった。ただ、地球という遊星があり、神によって任命された統治者なる人間がいただけである。人間が、神との交わりを拒否し、サタンの虚偽に従うという選択をした時、人間は、いのちの権利証をサタンに与えただけではなく、地球そのものの権利証も与えたのである。この世の制度が発展し始めたのは、実に、その時であった。

たのである。

アダムは、この遊星地球を、その上にある被造物や水、火、空気などの要素をも含めて、支配する権利を与えられていた。「神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。『生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。』」(創世一・二八)。アダムは、完全な委任状を持っていた。しかし、彼が神を拒否し、サタンに従うという選択をした時、人類、動物、および地球の法的な所有権はサタンに移されたのである。神は義なるおかたなので、サタンに対してすら、この法的な権利を尊重しなければならなかった。人間と世界は、罪——それは、所有権のサタンへの移動をもたらしたものである——の値が支払われるまでは、もとの状態にもどることはできなかったのである。

イエスは、確かに、サタンが世に対する法的な権利を獲得したことを知っておられた。サタンがその欺く力をもって、個人的にイエスを誘惑した時、聖書は次のように言っている。「また、悪魔は……こう言った。『この、国々のいっさいの権力と栄光とをあなたに差し上げましょう。それは私に任されているので、私がこれと思う人に差し上げるのです。』」(ルカ四・五—六)。

私たちの世的な頭をもつては、イエスに一瞬のうちに世界の国々をすべて見せたような、神秘的な力を理解することはできない。おそらく、サタンは、自然の美しさのパノラマと国々のはなやかさをまぜあわせた、すばらしい映画のようなものを見せたのであろう。サタンは、この

世をこの上なくすばらしく見せることができるので、人々は、その生涯をそれに打ち込もうとするのである。そして、ある人は実際に、そうしている（テモテへの手紙第二、四章一〇節にある、前途有望な若い教役者デマスの悲劇を見よ）。

イエスは、サタンのこの世に対する権利の主張を論ばくすることはされなかった。イエスは、アダムがこの地球全部の、そして、その上にあるすべてのものに対する法的な所有権をサタンに引き渡したことを知っておられたのである。

ずるい設計者

サタンは、時を移さず、人間の心を神から背けさせるような場面を作り出すことにとりかかった。創世記四章は制度の開始を記録している。

この世の制度の最も基本的なものの一つは宗教である。それは、人間の傲慢に基づいていて、人は、神に受け入れられるために、何かをすることができるということを仮定としているのである。真の信仰は次のように言う。神が備えてくださったあなたの身代りが、罪の罰をあなたに代って負ってくださったという事実に基づいて、ゆるしを賜物として受け取ることによってのみ、神に受け入れられる、と。アベルは、真の道を通して神に近づいた。彼は、定められた動物の犠牲を自分の罪のために死ぬべき身代りとして、携えて来たのである。それに対してカインは、

この世的な制度の道を通してやって来た。彼は、自分自身の労働の実を携えて来たのである。アベルは受け入れられ、カインは受け入れられなかったのである。

神はカインを説得し、真の道をとらせようとすらしなかった。「そこで、主は、カインに仰せられた。『なぜ、あなたは憤っているのか。なぜ、顔を伏せているのか。あなたが正しく行なったのであれば、受け入れられる。ただし、あなたが正しく行っていないなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたは、それを治めるべきである。』」（創世四・六七）。

カインの自尊心が燃え上った。神が備えてくださった信仰によってではなく、宗教が幾世紀にもわたってしてきたことをしたのである。彼は、神の真理を代表している者を殺害したのである。宗教は真理を我慢することができない。なぜなら、真理は人間の自己中心と高慢を非難するからである。だからこそ、歴史上における最大の犯罪のうちの幾つかが、偽りのキリスト教、偽りの宗教の名のもとになされたのである。にせものはほんものを我慢することができない。

この世の制度は、高慢、神の真理の拒否、暴力という根源的な原則のもとに始まったのである。

カインが建てたもの

カインが、「主の前から去った」時（創世四・一六）、この世の制度が更に発展して行くのを私た

ちは見る。カインが、高度に発達した社会と文化を建設したのであるが、それは神を除外していた。彼は、聖書に記されている最初の町、エノクを建てた。

それに続く数世代において、多くの前進がなされた。「ヤバルは天幕に住む者、家畜を飼う者の先祖となった」(創世四・二〇)。農業が発達し始め、盛んになった。

「ユバル……は立琴と笛を巧みに奏するすべての者の先祖となった」(創世四・二一)。音楽、美術、文化がこの世の制度に導入された。

「トバル・カイン……は青銅と鉄のあらゆる用具の鍛冶屋であった」(創世四・二二)。そして今、私たちは、産業の発達が初期の世の制度に包含されているのを見る。

これらのものは、それ自体悪いものではないが、紛れもない問題が一つあった。彼らが神を除外したことである。人間の達成した事柄が、人間の心を神から引き離すものとなった。文明全体が、唯物的、世俗的に組織化され、発達していたのである。人間の傲慢な自己満足、神の真理の拒否、そして暴力が全制度に浸透していたのである。

アダムの子セツが、エノシュという男の子を生んだ時初めて、「人々は主の御名によって祈ることを始めた」(創世四・二六)。

最初の世の制度には、あらゆる種類の悪が浸透していたので、神は、それを滅ぼさなければならなかったのである(創世六―七章)。

愛情のわき道へ

世とのほんとうの戦いは、私たちの愛情のような根本的なものと関係がある。サタンは、誘惑では私たちに肉の大きな罪を犯させることができないと、今度は、教育、出世、自然界、金銭、名声、その他数えきれない、一見無害で価値があると思われる道に切り替える。もしサタンが、私たちの愛情をキリスト優先から離して、第一に、この世の制度の何かに向けさせることに成功するなら、彼は、私たちをわき道にそれさせ、世俗の網で捕えたことになる。ヨハネが、次のように警告しているのはこのためである。「世(コスモス)をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世(の制度)にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの傲慢などは、御父から出たものではなく、この世(の制度)から出たものだからです」(Iヨハネ二・一五―一六)。

世と友好的な関係を持つことは、神に敵対することである。なぜなら、この世の哲学、その人生観は神の人生観とは矛盾するものだからである。この世とそのやり方に従うことは、必然的に、私たちの愛情を神からそらすことになる。中立の立場といったようなものはない。だからこそ、ヨハネは、「もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません」と警告したのである。

この世の制度の目に見えるすべてのものの背後には、欺瞞の達人であるサタンの、目に見えない天才がある。「世の制度」の背後には、それらを用いて、私たちを、キリストへの献身から、それ以外のものへの献身に向けさせようとしている黒幕の指導者がいるのである。ひとたびこのことがなされると、不可避的に貪欲な力が加わってくる。他の何ものも、神との交わりに代えることはできないから、私たちは、決して、満足することはない。私たちは、多くを得れば得るほど、更に多くのものを望む。このことをヤコブは次のように述べている。「あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをするのです。うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのです。あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。願っても受けられないのは、自分の快楽のために使おうとして、悪い動機で願うからです。貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです」(ヤコブ四・二―四)。

サタン、この世の支配者

この世の制度の後ろ盾となっている極悪な黒幕は、人々を欺き、わなに陥れている。彼は、キリストを信じない者にも、信じている者にもひどいわがをしっているのである。

サタンのわざを述べるのに、三つの肩書きが用いられている。まず第一に、彼は、「この世を

支配する者」である。それは、彼が、人間の政府とその政治組織を通して、絶えず働いていることを意味する。あなたは、私を、無政府主義者だと非難されるだろうか。ちょっと待っていただきたい。私は、すべての政府が全面的に邪悪であるとか、不道徳であるとか言っているのではなくて、サタンが、自分の目的をとげようとして、あらゆる形態の政府をあやつることができると言っているのである。

イエスは、この世の制度の、政治の糸をあやつっている者について詳細に述べておられる。イエスを、単なる歴史上の人物、あるいは偉大な教師としか見ない人でさえ、彼が、経験に裏打ちされないことは何一つお教えにならなかったということを容認しないわけにはいかないだろう。次に、イエスが、「この世を支配する者」について語っておられる聖書の箇所を幾つか抜粋してみよう。

「今がこの世のさばきです。今、この世を支配する者は追い出されるのです」(ヨハネ二・三二)。

「わたしは、もう、あなたがたに多くは話すまい。この世を支配する者が来るからです。彼はわたしに対して何もすることはできません」(ヨハネ一四・三〇)。

「さばきについては、この世を支配する者がさばかれたからです」(ヨハネ一六・一一)。

ここに掲げた聖句で、支配する者、にあたるギリシヤ語は、「アルコーン」である。この語に

は、特別な意味があつて、「アルコーン」が用いられる時、それは、サタンのこの世に対する邪悪さを強調しているのである。文字通りには、政治上の支配者を意味し、この地上の政治組織に対するサタンの支配を強調しているのである。

ダニエル書から、このことの実例を見よう。ダニエルは神の偉大な預言者のひとりであつた。ある時、彼は、預言の幻を与えられたが、それを解き明かすことができなかったで、神がその意味を示してくださるように祈つた。

ダニエルは二十一日間を祈りに費やした。すると、ひとりの御使いがダニエルに現れ、幻の意味を示すために来たと語つた。その説明によると、御使いは非常な遠回りをしなければならなかつた。「ペルシヤの国の君が二十一日間、私に向かつて立っていた」(ダニエル一〇・一二)。

当時、ペルシヤが世界を支配していた。神の御使いたちのひとりを邪魔していたのは、単なる人間ではなく、悪霊、あるいは墮落した御使いで、サタンの將軍たちのひとりであつた。それがペルシヤの国の君をあやつっていたのである。その君の背後にあつた強力な霊的存在者の力が、実に、二十一日間も御使いに立ち向かつていたのである。神が、御使いのかしらミカエルを遣わして、その悪霊を打ち負かしたので、御使いは、やっと、ダニエルのところに来ることができたのである。

これは、単なる古代史、ダニエルの時代の出来事ではない。聖書によれば、世界の出来事の背

後にはいつも、目に見えない戦いがなされているのである。聖書は、創世記からヨハネの黙示録に至るまで、この「目に見えない戦い」を述べている。この世の制度の背後にある、おびただしい、高度に組織化された悪霊の軍隊については、エペソ人への手紙六章一二節に、明確に啓示されている。「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」

空中の権威を持つ支配者

サタンの第二の肩書きは、「空中の権威を持つ支配者」である。人は、クリスチャンになる前には霊的に死んでおり、この支配者のもとにある。「あなたがたは自分の罪過と罪の中に死んでいた者であつて、そのころは、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従つて、歩んでいました」(エペソ二・一二)。

空中、と訳されているギリシヤ語は、文字通りには私たちが呼吸している空気を意味しているが、この文脈では、文字通りの意味に用いられていないことは明らかである。その語に先立つ「この世の流れ」ということばは、神を認めない世の制度の世界観に立つ思想と環境から、世を見ているものである。

それに続く「今も不従順の子らの中に働いている霊」ということは、不信の世で精力的に活動している悪の霊を見つめて述べられている。どちらのことばも、人の思考と行動を動機づけ、形成する力について語っているのであるから、「空中」は、文脈からみて「ムード」あるいは「思想の雰囲気」のことを言っているのに違いない。

サタンは、神に敵対するこの世の制度の、思想の雰囲気の背後にある君であり、力であると言われている。私たちが、イエス・キリストを信じ、霊的に生れる以前には、知らず知らずのうちに、この、思想の雰囲気に支配されていた。

「空中の権威を持つ支配者」として、サタンはこの世の制度の思想を支配している。彼は、洗脳を、人間の支配者が捕虜に対してするずっと以前に考え出していたのである。

サタンは、この役割を果たすために、彼の裏切りを教育制度、哲学、マス・メディア、美術、流行のスタイル、および文化の中に注入した。彼は、コップーバいの毒を隠すために、真理の湖を用いるであろう。人生とその目的についての彼の欺瞞は致命的である。この世的な生き方に少しでも倣うことは霊的な姦淫を犯すことになりかねない（ヤコブ四・四）。

サタンがこれらすべての思想形態の支配者であり、私たちが、日々これらの思想の攻撃を受けていることを悟る時、この世の制度というものがどんなに致命的であるかを知り始める。同時に私たちは、ヨハネの手紙第一、五章四―五節にある、「なぜなら、神によって生まれた者はみな、

世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか」という約束の重要性を悟り始めるのである。

私たちの心をイエスに集中するなら、私たちは、神の人生観——それは、この世の制度の中の人間的な見解とは全く相入れないものである——によって、絶えず私たちの思いを新たにして行くことができる。

人間的な人生の考え方は、日ごとの問題やこの世にある生活上のあらゆるやっかいな事柄を、それらに対処する人間的な能力という見地からながめ、神の見解は、人生を明け渡したあなたを通して、それを処理する神の能力という観点からながめる。あなたの誘惑、あなたの必要を処理するのは神の仕事である。この神の見地に立っている者には、心の平安があり、安定性があり、力があるのである。

だからこそ、ローマ人への手紙一二章二節は次のように述べているのである。「あなたがたの周囲の世俗性があなたがたを圧縮して、世俗の型にはめようとするのを許してはなりません。神に、あなたがたの思いを、内側から改造してもらいなさい」（フィリップス訳）。

この世の神

サタンの第三の肩書きは、「この世の神」である。世と訳されているギリシヤ語の原語は「アイオン」で、歴史上の一時期に流行している思想を意味することが多い。サタンは絶えず流行を変えている。だから、今流行に従っていると思っても、それはすでに、過去のものになってしまっているのである。そのペースは加速度的である。世の制度は、この上なく目まぐるしく変化するので、世そのものでさえそれについて行けないほどなのである。

将来、古い慣例は非常に急激な変化をとげようとしているので、人々は、心理学的に、非常な不安と情緒的な障害を経験することになるであろう。頼みになるもの、安定したもの、確実なものは何もないのである。

「この世の神」はまた、宗教に関するサタンの活動とも関連性を持っている。サタンは宗教を好む。それは、真理に対して私たちを盲目にするための彼の切り札なのである。彼はイエス・キリストに従っていないすべての者の神(The God)である。どのような宗教でも、キリストを離れた宗教を信じている人々は、最後にはサタンによって欺かれる運命にあるのである。しかし、慰めとなるのは、サタンが、真に神を知ろうとしている者を永遠に盲目にしておくことはできないということである。人がどこにしようと、ラプランドにしようとアフリカにしようと、ダビユー

クにしようとデンバーにしようと、彼は神を意識するようになりうると聖書は言っている。

「しかし、真理を押しつける、罪深い邪悪なすべての人に、神様の怒りは天から下ります。なぜなら、彼らは神様についての真理を、本能的に知っているからです。神様が、この知識を、彼らの心にお与えになったのです。世界が創造されてからこのかた、人々は、天地や、神様がお造りになったすべてのものを見て、神様の存在と、その偉大な永遠の力をはっきり知っていました。ですから、彼らには弁解の余地がないのです。」(リビングバイブル ローマー・一八―二〇)

もし人が、心から神を知りたいと願っているならば、神は、天地を動かして、彼自身が自身のあわれみにゆだねえる知識の光を与えてくださるであろう。「もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう」(エレミヤ二九・一二)。

サタンは、誠実に神を求めている人を盲目にすることはできないが、自分たちの持っている光を拒否する人々なら盲目にしようのである。これは、ひとりひとり、どんなによい意見を持てようと、どんなによい原則に従ていようと、どんなに多くのよいわざをしていようと直面しなければならぬ厳粛な事実である。もし、キリストに従っていないなら、その人は、知らず知らずのうちに、「この世の神」であるサタンに従っているのである。

「もし私たちの宣べ伝える良い知らせが、だれかの目に隠されているとしたら、永遠の滅びに突っ走っている人に対してです。それは、この邪悪な世の神であるサタンのしわざです。目隠しをさせて、その人の上に輝いている良い知らせの栄光が見えないようにしているのです。また、まことの神、キリスト様の栄光に関する、私たちのすばらしい証言を、理解できないようにしているのです。」(リビングバイブル II コリント四・三一四)

歩きまわっている匿名者

「悪魔の最も悪賢い策略は、悪魔が存在しないことを人々に信じさせることである。」^{注3}

だからこそ、私たちは、角を持ち、赤い服を着、尾を見せびらかし、薄気味悪い笑いを浮かべている、こっけいなサタンの絵を見るのである。もし彼が、単に漫画に登場する人物、あるいは神話的な悪漢にすぎないなら、時々私たちを、悪夢に悩ます以外にはほとんど害を与えはしないであろう。サタンは、映画スターよりも巧みに、変装している。彼は、宗教、主知主義、詩、美術、音楽、心理学、人間的な理解力の背後に、そして、私たちの人間的な「自我」の背後にさえ隠れているのである。聖書には、「全世界は悪い者の支配下にある」(Iヨハネ五・一九)と記されている。

すべての人は、イエス・キリストのもとに来るまでは、サタンの支配下にある。これは深い真

理である！ 私たちが、あれかこれか、黒か白かの選択に直面する時、私たちの大部分は、「……かもしれない」というあいまいなことばでごまかしたり、黒でも白でもない灰色の態度を取ったりしたいと思うであろう。現代思想は、サタンが、悪の根源であり、世界を自分の支配下に置いているという古風な考え方を拒否する。人間はおびただしい数の悪の説明を持っている。例えば貧困、汚染、政治家、警察、両親、雇い主、労働組合、民族的少数派、民族的多数派等々である。この中からあなたの好きなものを選ぶとよい。人は、「だれかを非難するのはよい。しかし、サタンのことだけは話してくれな。全く不愉快だから」と言う。

サタンが、どこでどのように働いているかを理解しないという点では、クリスチャンたちも例外ではない。実際、サタンについての教理は、長い間無視されてきているので、彼らは、この世の制度についての洞察力をほとんど持っていない。特に傷つきやすいのは若いクリスチャンたちである。フランシス・シェーファーが言ったように、「私たちは、次の世代を、裸のまま二十世紀の思想に直面させようとしている」^{注4}のである。

サタンは、地獄にいて、永遠の炉に石炭を投げ込んでいるのではない。モダンな、最近の墮落した傾向には双手をあげて賛成しているのである。神がサタンに直接質問された時、彼の答えは、次のようなごう慢、不遜なものであった。「主はサタンに仰せられた。『おまえはどこから来たのか。』サタンは主に答えて言った。『地を行き巡り、そこを歩き回って来ました。』」(ヨブ二・二)。

何という絵であろう！ サタンは、地上をくまなく行きめぐり、あらゆる場所で絶えずわざを
しているのだ！ 彼は、私たちの世の制度の中で、政府、教育、ビジネス、文化を通して活動し
ているのである。

五 悪霊つきの診断

確かに、わたしは、あなたがたに、蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ
權威を授けたのです。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つありません。

(ルカ一〇・一九)

旧エルサレム市街は狭く曲りくねっている。ふたり、あるいはそれ以上が集まると、すぐ込み
合ってしまう。私たち聖地旅行団の一行は、強いにおいのする屋台店の前を通り、カメラをぶら
ぶらさせながら進んでいた。その時私たちは、交通の渋滞でとどめられ、見ると、ひとりのぼう
ぼうの髪をした男が激烈な口調で演説しているのを、何人かの人が聞き入っていた。

妻のジャンと私はその男のことでなんだか不安になった。というのは、その男が、私たちのほ
うを見ているように、思われたからである。その男から離れようとする、彼は、私たちについ
て来た。男は、ほとんど狂乱状態で、同じ短い演説をくり返しているようであったが、私たち
にわかったことばは、「アメリカ人」と「マホメット」という二語だけであった。彼はマホメット

の大きな絵を持っていたのである。

大群衆が集まり始めた時、私は、すばやくその男のスナップを撮った。それからジャンに、「さあ、ここから出て行こう」と言って、足早にダマスコ門の方に向かった。するとその男は、なお叫びながら、私たちが門を通り抜けるまでついて来たのである。危険が去った時、私たちが、大喜びしたことは言うまでもない。

私が、国に帰って初めて、イスラエルで撮った写真を人々に見せていた時、たまたまその乱暴な男の写真が出てきて、ハッとした。私は、イスラエルでその男を見守りながら、どんなことを考えていたかを思い出した。そして、私の最初の評価が正しかったことを知ったのである。顔全体の表情、特にその目は、彼が悪霊につかれていることを確証していた。

私はこの問題を軽々しく取り扱おうとしているのではない。あなたがたが、悪霊つきを調査すると、だれもかれも皆悪霊つきになってしまう傾向があるだろう。このことは、悪霊について全く無知であることと同様に、避けなければならないことである。

ある人が悪霊につかれているかどうかを診断しようとする時には、いろいろな特徴を総合的に観察できるような訓練と祈りが必要である。次に述べる特質のうちのどれを取り上げてみても、たった一つの特質だけで、ある人が、悪霊につかれていると決めつけることはできないと思う。

心霊あるいはオカルトの力

心霊力を持っている者に気をつけていただきたい。これは、人々についてのいろいろな事柄を感知したり、将来のことを予言したり、知りもしない相手を洞察したりする能力である。それは、神から与えられた識別力の賜物であることもあるが、また、サタンからきたにせものであり、悪霊つきの徴候であることもある。

パウロとシラスはこのような力を持った若い女に出会っている。「私たちが祈り場に行く途中、占いの霊につかれた若い女奴隷に出会った。この女は占いをして、主人たちに多くの利益を得させている者であった」(使徒一六・一六)。

占いというのは、将来の事柄を予言し、あるいは、隠された情報を発見する能力である。ある聖書学者は、「占いは、サタンによる聖書の預言の偽造品である」と言っている。^{註1}

その占いをする女奴隷は真にやっかい者であった。「彼女はパウロと私たちのあとについて来て、『この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えている人たちです。』と叫び続けた」(使徒一六・一七)。

この出来事において、重要な事が二つある。まず第一に、その占いをする女奴隷は、パウロとシラスの使命を正確に述べていたことである。彼らは「いと高き神のしもべたち」であった。第

二に、彼女は、虚偽を巧みに、真理の中にまぜたことである。原語のギリシヤ語では、彼女はこの個所において、文字通りには次のように言っているのである。「ある救いの道をあなたがたに宣べ伝えている人たちです。」

イエス・キリストは「ある救いの道」であったが、他の救いの道もあったということが意味されていたのである。しかし、聖書はこの点について、次のように言明している。「この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです」(使徒四・一二)。

どのように悪霊たちが事をなすかに、注意していただきたい。女奴隷は悪霊の力によって語っていた。パウロもシラスも知らないのに、彼らに関する真理を語っていたのである。そして、占い師がよくするように、虚偽を事実によってカムフラージュしたのである。

彼女は執拗であった。「(彼女が)幾日もこんなことをするので、困り果てたパウロは……」(使徒一六・一八)。

なぜパウロは、彼の使命についてのこの占い師の証言によって、そんなにまでいらいらしたのだろうか。彼は、それが、「敵を打ち負かすことができなければ、敵と妥協せよ」というサタンの古い戦術の一つであることを認めていたのである。悪霊につかれた女奴隷の占いの証言を受け入れていたなら、幾つかの結果がもたらされていたことだろう。まず第一に、人々の目には、そ

れが彼女の能力の承認と映じ、多くの人々を欺瞞にさらすことになったであろう。なぜならサタンは、多くの真理を語りながら、その後、巧妙なうそをそっとまぜるからである。第二に、パウロをサタンの攻撃にさらしたことである。

パウロは明らかに、霊を識別する賜物を持っていた。なぜなら、彼は次のようにして問題を解決したからである。「パウロは、振り返ってその霊に、『イエス・キリストの御名によって命じる。この女から出て行け。』と言った。すると即座に、霊は出て行った」(使徒一六・一八)。

悪霊の活動に関係すると、悪魔的な影響を受けやすくなる。たとえば、霊応盤(訳注Ⅱアルファベットや色々の模様がついている板の上に仕掛けられたプランセットで占いをする)、ターロー・カード(訳注Ⅱイタリア式カルタ、七十八枚で一組)、天宮図、水晶体、手相、吉凶判断、その他どのような形式によるものであろうと、そうである。私は、このようにして、悪霊のひどい影響が始まった実例を知っている。

私たちは、「悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります」(ヤコブ四・七)と命ぜられている。もし抵抗しないなら、私たちの生活の中に、サタンが速やかに入ってくる突破口を作ることになるだろう。どのような形のものであれ、オカルトをもてあそぶことは、悪魔に抵抗しているのではなく、助けていることになる。

悪霊につかれた女奴隷の場合のように、占い師は、あなたの過去や現在をこの上なく正確に言

いあてることができるかもしれない。その結果、あなたは、その占い師がほんとうに超自然的な力を持っていると確信し、その予言が現実になると思うかもしれない。このようにしてあなたは、自己を満足させる予言の方向に進むことになりかねないのである。

占い師の予言が適中すると、人は、悪魔の奴隷となることがある。私のクラスメートであったひとりの青年は、母親が最初の子を宿していた時、彼女の家の戸口にやって来た占い師のことについて、私に次のような話をした。その占い師は彼女に、「あなたは、もっと年をとらなければ子どもを持つことはできません。そして、もうすぐ、あなたの家族の上に悲劇が起りますよ」と告げたのである。母親はすでに妊娠していたが、人に気づかれるほどではなかったもので、その占い師をいんちきだと思って、一笑に付した。しかし、彼女の胎児は死に、二番目の子どもも死んだ。それ以来、彼女は、占い師の力によって悪魔のわなにかかったとふさぎ込むようになったのである。どんなに無害に見えても、占い師を軽視してはならない。

魔術

人が魔術によって、時に、どんなひどい悪霊つきの危険にさらされるかを、理解するなら、魔術に関することも用心しなければならぬ。私たちがここで言うのは、私たちを楽しませる熟練した手品や巧みな見せ物師のことではない。これらは、愉快で、合法的なものである。しかし、

別の形の魔術があり、それには、催眠術、黒魔術、超自然的な諸力が包含されている。

私たちが悪霊つきの徴候として言及しているたぐいの魔術とは、「神によって禁止されているもので、超自然的な霊的存在者に訴えて、人間の力ではなしえない結果をもたらそうとする術」である。^{注2}

世界的に優れた聖書学者のひとりである、アンガー博士によれば、現代の懐疑論者たちは、神の力、悪魔の力のいずれをも否定する傾向にあるということである。この懐疑主義に結びついているのは、魔術の性質についての考え方にある混乱である。私たちの学びのために重要な点は、亡霊にテーブルをこつこつたかせたり、家具をひとりで動かさせたり、妖怪を出現させたり、その他の超自然的な出来事をもたらす多くの霊的現象は、悪魔による欺瞞の一部であるということとを、理解することである。

ある人々は、神からきた魔力を持っていると主張するかもしれない。聖書は、そのような偽りの主張をしたひとりの魔術師について、語っている。「ところが、この町にシモンという人がいた。彼は以前からこの町で魔術を行なって、サマリヤの人々を驚かし、自分は偉大な者だと話していた。小さな者から大きな者に至るまで、あらゆる人々が彼に関心を抱き、『この人こそ、大能と呼ばれる、神の力だ。』と言っていた。人々が彼に関心を抱いたのは、長い間、その魔術に驚かされていたからである」(使徒八・九—一二)。

このシモンという男は、あまりにも魔術に深入りしていたので、たとえ信仰を告白しても、その信仰はほんとうのものではなかったのである。ペテロは、彼のえり首をつかまえて言った。「あなたの金は、あなたとともに滅びるがよい。あなたは金で神の賜物を手に入れようと思っているからです。あなたは、このことについては何の関係もないし、それにあずかることもできません。あなたの心が神の前に正しくないからです。だから、この悪事を悔い改めて、主に祈りなさい。あるいは、心に抱いた思いが赦されるかもしれません」(使徒八・二〇—二二)。

悪魔のわざを伴った魔術の歴史を読んだり、それを実行したりすることは避けるべきである。

* この問題をクリスチャンとしての洞察力をもって研究するには、*The History and Practice of Magic* by Paul Christian, The Citadel Press, Inc, New York, 1963. を参照せよ。

ネクロマンシイ

ネクロマンシイとは、死者を呼び出したり、死者と通じ合うことにより将来を予言したりすることを言う。霊媒が死んだだけかを呼び出すのは、たいていの場合、悪霊の欺瞞である。すなわち、悪霊が、死んだだけかのみをして、霊媒を通して語っているのである。ネクロマンシイは歴史の最初からあった。旧約聖書には、その明確な実例が記されている。

イスラエルの最初の王であったサウルは、神に不従順であった結果として、幾度も神との交わりを失ってしまっていた。神は、祭司や預言者たちを通して、彼に指示を与えることをやめておられた。その上、最も尊敬し、信頼していた預言者のサムエル——彼はまた、サウルの友でもあったが——も死んでしまった。

イスラエルの敵たちが、大軍を集結し、イスラエルに侵入しようとしていた時、サウルは、悪罪を犯した。自暴自棄になった彼は、死んだサムエルを呼び出すために、霊媒を探した。換言すれば、彼は降神術を求めたのである。サウルは、これが禁止されていることを知っていた。なぜなら、彼はそれより先、国内からすべての霊媒や口寄せを追い出していたからである(申命一八・一〇—一二、Iサムエル二八・三)。

サウルの家来たちは、エン・ドルに霊媒する女がいることをつきとめた。サウルは、変装してその女のところへ行き、彼女を説きふせて降神術を行わせ、サムエルを呼び出させた。

サムエルが現れると、彼は、罪のゆえにサウルを非難し、イスラエルはペリシテ軍によって打ち破られ、サウルとその息子たちは戦死するであろうと予言した。

神は、サウルにとってネクロマンシイの罪は、それ以上、許容できない決定的な罪と考えられた。事実、翌日の戦場でサウルとその息子たちは死に、イスラエルは敗北したのである。

私の若い双子の娘が、同級生が年上の学生たちと共に、降神術の会を開こうとしていることを

話してくれたことがある。今日、降神術は、多くの中学、高校、大学で人気のある娯楽と考えられているが、神は、この降神術を極めて重大なものと考えておられることを、すべての人が理解しなければならない。

もう一度、モーセを通して、神の警告に耳を傾けていただきたい。「あなたのうちに……占いをする者、卜者、まじない師、呪術者、呪文を唱える者、霊媒をする者、口寄せ、死人に伺いを立てる者があってはならない。これらのことを行なう者はみな、主が忌みきらわれるからである」(申命一八・一〇—一二)。

降神術をもてあそぶことは、あなたが信者であれ未信者であれ、その生活の上に強い悪魔的な影響力をもたらす突破口を開くことになるかもしれない。それは、若死にをもたらすことすらあるのである。

パイク主教は、死ぬ前に、霊媒やネクロマンシーに没頭していた。

* 詳細については、Dr. Merrill Unger's *The Haunting of Bishop Pike* を見よ。

知力における著しい変化

悪霊が生活に深刻な影響を及ぼす時、その人の知力が、突然に、あるいは時折増大することが

ある。この最も顕著な実例は、アドルフ・ヒトラーである。彼は、信じがたいほどの知力を持っていたが、正規の教育は全く受けていなかった。彼はナチに関係するようになってから、異常な知的能力と弁舌の力を示し始めた。彼の演説の巧みさは、明らかに悪魔的であった。

ヒトラーは、ドイツ国民に催眠術をかけ、国民は、進んでヒトラーに従ったのである。彼のすぐれた弁舌の才能は、数えきれない人々にとって致命的な、まだら服を着たハメリンの笛吹き(訳注：ドイツの伝説上の人物。ねずみの襲来に困っていたハメリンの町から、笛の妙音でその一群のねずみを誘い出し、ヴェーゼル川に水死させたが、約束のお金が町から渡されなかったため、その笛の音で町の子どもたちを誘い出し、コッペンベルクという山中に隠してしまった)の笛であった。

悪霊の力の働きは、人々が進んで悪魔的な指導者に従おうとしているような地域では特に強い。あくなき野心と有名になりたいという願いが人を取りこにする時、サタンは、活動の足場を得るのである。

サタンよ、われに力を与えよ

悪霊は、人々に信じがたいほどの力を与えることができる。マルコの福音書五章にある、汚れた霊につかれたゲラサ人の場合、彼は、つながれた鎖を引きちぎったと記されている。だれも、彼を押さえるだけの力がなかったのである。私は、悪霊つきを研究し、実際、それに出会って

る。私は、すべての人に精神病だと思われていたひとりの隣人のことを思い出す。彼の示していた特徴から、私は彼が悪霊につかれていたと信じているのである。ある夜、彼は、ハンマーで自分の妻に瀕死の重傷を負わせた。彼を逮捕し、手錠をかけるために、警官がやって来た。身長百六十八センチ、体重五十九キロにすぎない彼が、かけられた手錠を引きちぎることができたのである。彼を引きおろし、パトロール・カーの中へ閉じ込めるには、数人の警官が必要であった。

今では私は、これが人間の力以上の何かであったということを知っている。以前私は、バークリーでこのような超人的な力を持った人を見たことがある。彼が、自分自身や他の人を傷つけることがないように取り押えるには、六人の男が必要だったのである。

抑うつ状態、失望落胆、自殺への傾向

もう一つの警告。これらの徴候を考慮するにあたって、私達は注意深くなければならない。なぜなら、それらの徴候は、他の原因で起ることもあるからである。しかし、他の徴候と結合し、悪霊つきあるいは悪霊の影響を強く示していることもある。

聖書からのいくつかの実例。サタンは、ユダを、自分の目的のために用いた後、罪責の力を用いて自殺に追いやった(マタイ二七・五一〇)。

マタイの福音書一七章一四―一五節の悪霊につかれた少年は、自殺への強い傾向を持っていた。

た。彼は、火の中や水の中へ飛び込んでいた。これは、悪霊がその少年を傷つけ、自殺させようとしていた結果だったのである。

ゲラサの悪霊につかれた人は、絶えず、石で自分自身を傷つけていた。これは、悪霊が引き起している自殺への傾向を示すものである。

事故が起ってしまったからでは、おそらくはっきりした原因はわからないであろうが、人々がガソリンをかぶり、マッチで火をつけるのは、悪霊たちに駆り立てられた結果である可能性が強いのである。

他の徴候と結合して、人の顔を観察して悪霊つきの証拠を認めることは可能である。本章の初めにあったエルサレムの演説者の話をおぼえているだろう。彼の目は大きく開かれ野性的だった。彼の顔は邪悪でゆがんで見えた。私は、これまでも悪霊につかれた人々の顔の表情を見てきたし、また、キリストが、それに奇蹟的な変化をもたらされるのを見てきた。

下品な、抑制しえないのろい

イエス・キリストや神の御名が述べられる時、ほとんど自動的にのろいのことを発するのは、汚れた霊、悪霊につかれている徴候である場合がある。イエスは、しばしば、このような事態に直面された。

絶えず、神およびキリストの御名を冒瀆することばを発しているのは、他の徴候と関連して、悪霊つき、あるいは悪霊の影響のしるしであることがある。

人格の根本的な変化

悪霊つきのこの特徴は、「地球最後の日」の一読者から受け取った手紙に、劇的に表現されている。

合衆国北西部に住むひとりの婦人は、ふだんは快活な家庭人であった彼女の夫が、あるパーティーで霊応盤のとりこになってしまった次第を物語っている。霊応盤が、彼自身および他の人々に関する質問の正確な答えをつづり始めた時、彼はひどく怒った。彼は、それが全くのたぶらかしであることを証明しようと決心した。次の日の夕方、彼は、仕事場から霊応盤を持って帰って、妻に仲間に入るように強く勧めた。再び、霊応盤は、彼が偉大な指導者となり、多くの人々に平安をもたらすであろうと予言し始めた。更に霊応盤は、そのために彼は、自分の家族を捨てなければならぬであろうと告げたのである。

これらの予言は続いた。彼の人格は、がらりと変ってしまった。彼は、家に帰らず、深酒をすることが多くなった。そして、とうとう引越しをしてしまい、時々家に帰って来るだけになったのである。

彼は、家にいる時にはいつでも、妻に霊応盤に加わるように強制した。そのかわいそうな婦人は、このような事態になってきたことにひどく驚いて、キリストを信じている友人たちに助けを求めた。しかし、夫にとってそのようなことは我慢できないことであった。

ついにある夕方、二人が霊応盤に質問していた時、霊応盤は、もうこれを用いる必要はない、霊が直接、夫を通して指示を与えるからという答えをつづった。

妻は驚いてしまった。夫はただちに催眠状態になり、夫のものとは異なった声で語り始めたのである。霊——それは悪霊だったが——は、それまでに霊応盤がつづったことをすべてくり返し、今や、彼女の夫がその使命を開始すべき時が来たと彼女に語ったのである。

それからしばらくして、ひとりの友が、彼女に、私（ハル・リンゼイ）が町に来て、オカルトの流行について講演することを告げた。彼女は夫を説得して、夫とともにその集会にやって来た。そして彼女は、霊応盤を通して、悪霊たちとかわわっていたことを知り、ショックを受けたのである。

彼らは、「地球最後の日」を、一冊手に入れた。妻がそれを読み、そしてとうとう、夫を説得して読ませた。その結果、彼は、悪霊たちと関係することをやめ、ゆるしを請い求め、イエス・キリストを救い主として受け入れたのである。

彼の人格はただちによいほうへ変った。彼は家に帰り、妻と共にイエス・キリストの救いの力

を真にあかしする者となったのである。

信者は悪霊につかれることがあるか

悪霊つきと悪霊の影響を区別することは、ある人々にとっては、重要なことであるらしい。悪霊の影響を受けている人は、悪の霊の力のもとにある。それは、精神的な苦痛から、極端で異常な行動に至るまでのあらゆる結果をもたらすのである。信者も未信者も悪霊の影響を受けることがある。

この問題を研究し、あるいは取り扱った大部分の聖書学者や宣教師は、悪霊つきを次のように理解している。すなわち、ひとつあるいはそれ以上の悪霊が人の中に住み、悪霊の性格が支配的となることと理解している。このような状態では、犠牲者の人格は悪霊の奴隷となり、悪霊は、事実上その人を完全に支配しているのである。クリスチャンが悪霊につかれることがあるかという問題について、アンガー博士はすぐれた研究をしている。^{注3}彼は、未信者は、悪霊の力によって完全に支配され、あやつられることがありうるが、クリスチャンの場合には、そのような完全な従属状態になることはまれであると述べている。これは私の立場でもある。しかし私は、これらの事柄を個人的に取り扱わなければならない多くの宣教師たちと話した結果、クリスチャンが、ある程度の悪霊つきの状態になることはありうると言わなければならない。

オーバーシーズ・クルセードのディック・ヒリスは、私に、悪霊につかれたクリスチャンの事例を提供している。ディックは、単に神学者としてではなく、信仰の戦士として、聖書に精通している。彼は、いたずらに感情に走ることなく、注意深い洞察力を持ち、生涯の大半を宣教地で過ごした。彼は、中共が支配する以前の中国にいた時に起った一つの出来事を語ってくれた。彼の教会の長老のひとり——疑いなくクリスチャンであった——が、ひどい悪霊つきのため、人格が変ってしまったという。そのことばづかいは下品で潰滅的になり、また力が非常に強くなった。教会員のひとりが、彼を一室に閉じ込め、ディックを呼びに来た。

ディックがドアを開けて入って行くと、この男は狂暴になり、奇妙な声で、「おれは、おまえがどんな人間か知ってるぞ」と叫んだ。

ディックも、「私も、あなたがどんな人間か知っています」と言った。そして、その悪霊に語り始めた。

これが、信者が実際に悪霊につかれ、別の声で語る実例である。

中国のように、偶像崇拜が公然と行われている国々では、人々は、悪霊の影響を受けたり、悪霊につかれたりすることが起りやすい。アンガー博士が言うように、「悪霊によって力づけられた偶像崇拜が、福音によって阻止されることなく、幾時代にもわたって栄えている国々では、悪霊つきから解放された新しい信者は、彼らのもとの偶像に立ち返る時、再び悪霊にとらえられる

ことになる」のである。^{註4}

クリスチャンが悪霊につかれることがあるという考え方に反対する主要な論拠は、聖霊がクリスチャンに内住しておられるという点にある。それゆえ悪霊は、聖霊が住んでおられる同じ場所に住むことはありえないというのである。

しかし、使徒の働き五章において、アナニヤとサッピラというふたりの信者は、確かにサタンによって支配されている。ペテロは、「アナニヤよ、なぜ、サタンがあなたの心を満たし、あなたは聖霊に対してうそを言い……」(使徒五・三詳訳)と言った。

「満たし」と訳されているギリシア語は、エペソ人への手紙五章一八節で、聖霊が、信者を支配し、力づけるお働きを表すために用いられている語と同じである。ただ、ここでは、聖霊ではなくサタンが支配しているのである。

ひとりの人が他の人を満たす、というのは、文字通りには、ひとりの人が、他の人の同意を得て、他の人を支配することを意味する。それゆえ、支配される人は、その支配を甘受した以上、支配されることに對して責任があるのである。この責任は、ペテロが再びアナニヤに対して次のように言った時、明確にされた。「なぜこのようなことをたくらんだのか。あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ」(使徒五・四)。

ここで重要なことは、アナニヤがサタンによって心を支配された信者であったということであ

る。私はここに、重大な警告が与えられていると信ずる。私たちが故意に、聖霊により頼んで誘惑に抵抗することをやめ、罪と知りながら、それを犯そうとする時はいつでも、私たちは、サタンの攻撃の可能性、そして支配の可能性にさえ身をさらしているのである。

イエスが弟子たちに、ご自身が逮捕され殺されることを告げられ、それに対してペテロが、そんなことが起るはずがないとイエスをいさめた時、もう一つの重要なことが語られた。イエスはペテロに、「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」(マタイ一六・二三)と言われた。イエスは、ペテロに向かって、サタンと言われた。なぜなら明らかに、サタンは、ペテロに影響を与え、彼をこの時点において、誤った方向に導いたからである。ペテロの目を神の目的からそらせ、人間的な見解に向けさせたのは、サタンであった。

これらの出来事、およびその他の出来事は、信者が——未信者の場合におけるように完全ではないにしても、一時的に——ある程度までサタンに支配されうること示していると思う。それは確かに、私たちに、絶えず聖霊により頼むべきで、人間的な力によって生きてはならないことを教えているのである。

サタンが、信仰によって歩み、聖霊に聞き従っている人を支配することはありえない。このことを、はっきりと理解しておく必要がある。このことについては、七章で更に詳しく述べたい。

エクソシスト

エクソシズム、すなわち悪い霊を追い出すという昔の問題は、私たち文明社会にも再び入ってきている。「エクソシスト」という本は、ベスト・セラーになっている。このようなことが、何か気味の悪い、非現実的な新しいところみであると考えている人々には、悪魔払いが異教にその起原を持つことを、指摘しなければならぬ。

悪い霊を追い出すための魔術や儀式は、幾世紀にもわたって、行われてきた。悪魔払いの方法の多くは、悪魔につかれていてる者にとって、苦痛に満ちたものであり、打ったり、つねったり、焼いたり、その他身体的な危害を加えることが含まれていた。アンガー博士は、インドのヒンズー教信者やマホメット教信者に、悪魔払いの場所としてよく知られている宮について語っている。暴力を用いたり、苦痛を与えたりすることは、ごく普通である。悪霊が特にしつこくて、なかなか追い出されないと、油に浸した綿の燈心に火をつけて、それを、悪霊につかれていてる者の鼻の穴につめるのであった。職業的なエクソシスト(訳注「悪魔払いの祈とう師」)の残酷さは、言語に絶するものがある。

未信者によって用いられている悪霊追い出しの方法について、読んだり聞いたりする時、私たちは、サタンの力によって悪霊たちを追い出すことさえ——もし、そうすることによってサタン

の教えや目的が推進されるならば——起りうることを理解するのである。

キリストとの対照

イエスが、悪霊たちを追い出すためにお用いになった方法は、ユダヤ教や異教のエクソシストのそれと著しい対照をなしている。マタイの福音書八章一六節には、弟子たちが、悪霊につかれた多くの者をイエスのみもとに連れて来た時、彼は、みことばをもって悪霊を追い出されたと記されている。儀式を用いることはされなかった。

イエスの弟子たちは、「イエス・キリストの名によって」悪霊たちを追い出した。キリストは、ご自身の復活の後、弟子たちに語られた時、彼らにこの権威をお与えになったのである。彼は言われた。「信じる人々には次のようなしるしが伴います。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し……」(マルコ一六・一七)。

イエスの御名は、その背後にある無限の、そして全能の神を表しているものであって、それ自身のうちには、魔術的な力を全く持っていない。「イエスの名によって」というのは、ごまかしのためのでたらめの文句ではない。若い未熟な信者に、このことを強調しなければならぬ。悪霊につかれていますと思われる人から、「悪霊を追い出そう」とする前に、私たちは、信者としての権威がどのようなものであるかを知り、神のことばである聖書から、真理を学ぶ必要がある。

のキリストは、「確かに、わたしは、あなたがたに、蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けたのです。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つありません。だが、しかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではいけません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい」(ルカ一〇・一九二〇)と言われた。

これは、この学びをしようとしているすべての人が把握しておく必要がある、主の約束である。信者として、私たちは、悪霊たちを制する権威を与えられている。そして、サタンが私たちを支配する唯一の場合は、私たちが、故意に、知りながら、そして執拗に、何らかの罪を犯し続けている時である。

私たちは、キリストと共に歩む時、恐ろしい事態に陥ることがあるかもしれない。しかし、もし私たちが敵に対する私たちの権威を主張しているなら、何ものも私たちを害することはできないのである。もし私たちが、このようなサタンの領域に入りながら、私たちの権威を知らないなら、トラブルに巻き込まれることになる。

サタンは、できるだけ虚勢をはって、私たちをおどすことであろう。彼は、私たちが彼に与える領地を皆取ってしまうであろう。しかし、もし私たちが神の約束に立ち、聖書からの権威を用いるなら、彼は、その権威を尊重し、逃げ去ってしまうだろう。私たちは、人間的な強がりや、からいばりのことを言っているのではない。十字架の勝利のことを語っているのである。私たちは

は、その勝利の背後に立ち、サタンの力を正しく認めなければならない。

キリスト教信仰における未熟さの危険の一つは、神が力のわざを示し始められ、この新しく獲得された信仰に答えられる時である。力に心を奪われ、賜物を与えられるおかたではなく、賜物そのものに心をひかれることは容易に起りうることである。信仰上の青年期において起る大きな危険は、わずかばかりの知識を持ち、それが、わずかばかりの知識であることを知らないことである。

最近私は、一冊の古い、測りがたい価値のある本を手に入れたが、その本は、この題目について深い洞察を示している。筆者は、深い思慮分別を持った学者であり、クリスチャンである人たちである。彼らは、「悪い霊にとらえられているたましいを救い出すためには、神と霊的な事柄についての、多くの知識が必要である」と言っている。^{注5}

もし信者が、ほんとうに悪霊につかれていると思われるケースに出会った時、彼のなすべきことは、たいていの場合、信頼できる成長した信者を訪問し、ふたりでどのように対処すべきかについて導きを求めて祈ることである、と私は信ずる。

聖会においてその婦人にどんなことが起ったか

この本を執筆する前には、私は、決して、だから悪霊を追い出したことはなかった。私は、

それをしていとも、特にそれをするのが楽しいことだとも思っていなかった。しかし、私は信じている。主は、私がこの方面のことをこれまでよりもよく理解できるように、第一章で簡単に述べたような経験をさせてくださったのだ、と。

第一章に登場する婦人が、私に、彼女の指にはめてあるサタン礼拝者のしるしである指輪を見せ、非常な意気消沈と失望落胆に自分を陥れた悪の霊について述べた時、彼女はまた、母と祖母が占い師であったことも明らかにした。確かに彼女は、その超自然的な能力を、このふたりから受けついでいたのである。

この婦人に、彼女のほんとうの問題が何であるかを告げることは、容易なことではなかった。ほんとうの同情心から私は、彼女が占いの霊につかれていたことを告げた。私が、これまでに読んだ多くの例によれば、このようなことは通常、先祖代々オカルトの力を持っている家族に起ると説明している間、彼女は一心に聞いていた。

私は彼女に、この超自然的な力を捨て、イエス・キリスト——このおかたのみが彼女を解放できるのである——に向かうべきこと、さもないと、この悪霊が彼女を殺してしまうであろうと強く主張した。

「あなたは、この霊から解放され、イエス・キリストをあなたの生活の中に受け入れることを願っていますか。」

彼女はちゅうちょしませんでした。「もしそれが、心の平安を見出すことを意味するなら、私は、ぜひそうしたいと思います。」

私はそれから、使徒の働き一六章一八節にある使徒パウロのパタンに従って祈りをささげた。「悪霊よ、イエス・キリストの御名によって命ずる。この女から出て行け。」

私はその時ほど、イエス・キリストの御名に權威を覚えたことはなかった。その婦人は、少しからだをふるわし、そしてすすり泣き始めた。

「次の祈りを、大きな声でしてください」と私は続けた。「私は、イエス・キリストが私の罪のために死んでくださった神の御子であられることを信じます。イエスよ、私の生活の中に来て、それをあなたに喜ばれるものとしてください。」

彼女は、約三分間ほど、その祈りをしようとして戦った。目に見えない手が、彼女ののどをしめてるように思われた。

私は、静かに、イエスがサタンの影響力を制圧してくださるように祈った。ついに彼女は、声を出してその祈りをした。

祈り終るやいなや、彼女の表情が目の前で一変した。彼女は輝いてきた。「私は自由です！」と叫んだ。そのことは、彼女にとっては、他の大部分の人々と異なった意味を持っていたのである。

彼女は、突然私のもとを去って、その聖会での最後の集会に行った。彼女が最初に出会ったのは、ジャンである。彼女はジャンに向かってだしぬけに、「あなたのご主人が、たった今、どんなことをなさったか知っていますか」と言った。

私の妻は、たやすく驚いたりしない性質であるが、ただちに、その婦人に驚くべき変化が起ったことを認めた。彼女の当面の必要を感じ取って、ジャンは静かに、「イエス・キリストはあなたのうちにおいでになりましたか」と、尋ねました。

「はい、確かにおいでになりました」と、彼女は喜びにあふれて答えた。

彼女はそれから、自分を連れて来た友人たちを探し、彼らにそのよい知らせを話して驚かせた。以前の超自然的な力が彼女を去ろうとしていた時、私は、彼女が持っているすべてのオカルトに関係がある品々を捨て去るように指示した。これらのものは、悪霊たちがとりつくための足場となることであるからである。彼女は、それに同意した。

その時、私はほんとうの喜びを経験した。彼女は、自分がその週末にずっと着用していた格子じまのスカートを指さした。

「あなたは、この格子じまをご存じですか。」

私は、しばらくそれを見つめていたが、「それは、リンゼイだと思います」と言った。

「その通りです」と彼女は答えた。「二、三週間前、私はスコットランドにいました。その時、

△私は、これからリンゼイという人に会う。そして、そのリンゼイという人が、私の生涯に深刻な影響を与える▽という予感がしたのです。それで私は、この格子じまのスカートを買い求めたのですよ。」

私は口をきくことができませんでした。後になってこの出来事を回想すると、私はスリルを覚える。イエス・キリストの御力は、私にとって、この上なくリアルであったのである！